

続・夏の淫獄

試し読み版

妄想虜囚

目次

(試し読み版は第四章途中までとなります)

あらすじ	2
人物紹介	3
第一章 夏の思い出	4
第二章 痴漢淫戯	35
第三章 黒い装飾糸	68
第四章 覚えたての恥戯	94

あらすじ

天津家は代々、天神の守護者たる巫女の家系である。人間界を淫らの世となさんとする鬼獣淫界の侵攻から人知れず人々を護ってきた。

亜衣、麻衣の双子姉妹は激闘の末、敵の首領、鬼夜又童子を討ち取った。不滅の存在である鬼夜又童子の前ではつかの間に過ぎないが、それでも平和を謳歌していた。

夏も終わりに近づいたある日、麻衣は後輩の彩奈と共に隣町の学校へと訪問していた。その帰宅途上。到着遅延の影響で異常な混み具合となった電車のなかで麻衣は痴漢に遭遇した。身動きの取れない麻衣は痴漢にいいように肢体をまさぐられてしまう。車内で偶然出会った学園の先輩、奈央も麻衣に魅せられ痴漢行為に参戦してきた。ごつごつした男の手とソフトな女のタッチ。剛と柔の攻めに麻衣の体はいつしか反応していた。

男は麻衣の隙をついて挿入を果たす。電車内での常軌を逸した行為に嘆く間もなく、麻衣は男の正体を知る。痴漢は淫鬼・灼熱法師だった。痴漢、レズ、車内強姦。彩奈までも巻き込み、麻衣は犯され続けた。異様な熱気的車内で、抵抗も虚しく麻衣の心身は限界を迎える。

淫獄と化した車内に紅の巫女戦士は囚われの身となった

人物紹介

亜衣……………天神子守衆の巫女。麻衣の双子の姉。祖母が亡くなり当主となる。得意な武器は弓。ポニーテールがトレードマーク。淫らの技に対して強靱な抵抗力を持つ。先祖より受け継いだ天女の羽衣の神通力で変身し、淫敵を射倒す。

麻衣……………亜衣の双子の妹。亜衣と同じく巫女であり羽衣の戦士である。ショートボブの可憐な娘。薙刀術を得意とし、邪淫の鬼を薙ぎ倒す

彩奈……………麻衣の部活の後輩。学園の大部分の生徒と同様に姉妹に憧れる。麻衣と共に事件に巻き込まれた。

奈央……………天神学園の卒業生。現在はOLをしている。グラビアアイドルの様なナイスボディの持ち主。可愛い女の子が大好き。麻衣と彩奈をレズ行為に引き込む。

灼熱法師……………鬼獣淫界の淫鬼。破戒僧。マグマのような肉体を持ち、炎熱を武器としている。

第一章 夏の思い出

木樹が生い茂り、緑に囲まれた天神学園。その一角にある弓道場で部員の少女たちが練習に励んでいる。長い夏休みも終わりへと近づきつつあるが、太陽は昨日と変わらずギラギラと輝く。伝統を感じさせる大きなひさしが張り出し、射場が直射日光に晒されるのを防いでいる。それでも少女たちは暑さに汗を流して練習に取り組んでいた。

武道の名門である天神学園の弓道部員は学生にしてはなかなかの構えで弓を引いている。その中に混じり素人でも一目見て分かるほどに、明らかに技量の異なる美しい構えで弓を引く少女がいた。

構えだけでなくその顔立ちも美しい。ポニーテールの長い髪。尻尾に例えるにはあまりに長いお尻まで伸ばした黒髪を、その穂先数カ所を結び束ねている。鋭い眼差しで的を見つめるその瞳は、邪な感情を伴って彼女を見る不届き者がいれば、たちどころにそれを看破するであろう強い眼力が感じられる。曲がったことを許さない強固な意志と有り余る正義感が視線からも物語っていた。

彼女の名は天津亜衣。伝統ある弓道部の主将にして、この天神学園でカリスマ的な人気を誇る美少女である。双子の妹である麻衣とともに、鬼獣淫界の淫鬼から人々を守る戦士でもあった。

ヒュンツ。

美しい射型から放たれた矢は予めそのように決められていたが如く、的の中心を射抜いた。残心を取りの的を見つめる彼女には、鮮やかな一射だったにも関わらず少しも喜ぶ様子はない。

亜衣は少し苛いらついていていた。どうにも心がざわつき落ち着かない。

昨晚、妹の麻衣が帰宅しなかった。それにはきちんとしたわけがあった。麻衣が乗った電車が事故に遭ったためである。昨日、麻衣はなぎなた部の新入部員、彩奈と共に隣の学校の学校に訪問した。その帰宅途中、この付近のローカル線である鷹冨線に乗車したのだった。

その日の鷹冨線は昼過ぎからトラブル続きだった。踏切の遮断機の障害、信号機故障、相次ぐ障害によりダイヤが大幅に乱れた。大幅な遅延により普段の数倍に混雑した列車で事故は起こった。列車が突如として動かなくなり、立ち往生してしまったのである。

止まった場所が良くなかった。小高い山林のまったただ中で停止した列車の救出作業は難航した。初動の不手際もあり、鉄道会社だけでなく警察、消防も救助に当たったが乗客の救出には深夜まで及んだ。冷房が止まった蒸し暑い車内に閉じ込められ、脱水症状を起こした乗客が続出した。

付近の公民館に緊急の救護室が設けられ、重症の患者は病院へと搬送された。軽症者三百人以上、重症者は二十人以上にも上ったと翌朝のニュースでは報じていた。

麻衣からもその状況は逐次メールにて連絡があつた。

『わたしは大丈夫。でも彩奈ちゃんが脱水症状のため病院で治療を受けることになりました。軽症で意識はしっかりしてますので心配なく。わたしは一緒に病院に行くのでお姉ちゃんは先に寝てください。またメールします』

今朝もメールが届いた。

『彩奈ちゃんの症状はもう大丈夫。今は彩奈ちゃんの家で安静にしています。でも彩奈ちゃんが塞ぎ込んでしまっていて……。みんなには言わないで欲しいのだけれど、彩奈ちゃん、電車の中で閉じ込められている間に酷い目にあつたみたいなの。はつきりとは話してくれないんだけど、痴漢されていたみたいなんだ。わ

たしがついていながらごめんなさい。電車の中で離ればなれになってしまった。彩奈ちゃんのご両親は今、海外旅行に行ってて一人きりなの。今日は彩奈ちゃんと一緒にいるね』

この心のざわつきはなんなのだろう？ 麻衣や彩奈のことが心配なだけではない気がする。

亜衣は昨日、この地域一帯の守護結界の修復状況について、天神子守衆を代表して祈祷師、法術師との会合に出席していた。

鬼獣淫界との壮絶な死闘は物理的にも霊的にも大きな傷跡を街に残した。要衝に点在する十トンを超える要石の半数が砕け散った。

結界の修復作業はこの国の総力を挙げて行われていた。作業状況は極めて順調であり、探知役の占星師からも鬼獣淫界復活の兆しは全くみられないとの報告だった。

亜衣は再び弓を構えた。弓を引くと自然にざわついた心が落ち着き、的しか目に入らなくなる。厳しい修行を積んだ亜衣はそのように出来ていた。

大気を切り裂く音が場内に緊張を走らせる。小気味好い音がした。放たれた矢は一射目と全く同じ軌道を描き、ほんの数センチ上に当たった。正確無比な上に

他の生徒とは矢速が格段に速い。弓矢が殺傷するための武具であることを改めて思い知らされる一射であった。一瞬の静けさの後、「的中!」、「亜衣様、お見事です!」見学している亜衣のファンから歓声が沸いた。

天神学園での亜衣の人気は神がかったものになっている。応援してくれるのは嬉しいが、他の部員に悪影響が出かねない。彼氏が出来たら減るのだろうか?

亜衣には彼氏がいなかった。そもそも恋愛経験自体がない。人並みに恋をしたという気持ち自体がないのだ。いずれは誰かと付き合わなければならぬのだと思う。ただそれは恋愛を楽しむというより、結婚し子供を産み、天津家の後継者となる次代の戦士を育てなければならぬといった使命感によるものだ。今時、家のために結婚するというのは時代錯誤にも思える。だが、彼女たち姉妹にはそれだけの責務があった。

彼女はちゃらちゃらとした男は嫌いだ。武道系の部活をしている男子生徒からの求愛も多かったが、強さをひけらかすような男はもつと嫌いだ。嫌いだ。

そういった手合いのすることは大抵決まっている。不^ぶ羨^{しつ}な告白を当然の様に

断られると、力尽くでものにしよう腕力で実力行使に出てくるのだ。そんなとき亜衣は相手の得意とする武道で思い上がった根性を叩きのめしていた。柔道家を締め落とし、空手家には蹴りを食らわせ悶絶もんぜつさせ、剣道家は手刀で昏倒こんとうさせた。

今や彼女は男性そのものに対して不信感を抱いていた。それには鬼獣淫界との戦いのなかで受けた心の傷が影響を及ぼしていた。

鬼獣淫界の刺客、カーマ、スートラの二人組に亜衣と麻衣は捕らわれた。そして、淫らな宴の催し物として貞操を奪われたのである。

戦いが終わるまでの間はそんなことに気にも留めもしなかった。彼女たちよりももつと苦しむ人々がいたためだ。何より、姉妹の祖母、幻舟は戦いのさなか命を落とした。しかし、惨い陵辱は乙女の心に大きな傷跡を残していたのである。

鬼獣淫界の領袖、鬼夜叉童子を討ち、戦いは終わった。敵の奇襲で火を放たれた家を失った姉妹は、屋敷を建て直すまでの間、子守衆の一人でもある遠縁の家で世話になっていた。

ある晩、姉妹で枕を並べて寝ているとき、亜衣は夢をみた。腕を後ろ手に縛られ、身動きがとれない亜衣に男がのし掛かってくる。必死に抵抗を試みたが犯さ

れた。男は見せつけるように大きく腰を振った。亜衣はどうすることも出来ず悔し涙を流す。声を上げてても助けは来ない。途中からそれが夢だと半ば気がついてても目覚められない。

永遠に続くかと思われたとき、誰かに揺さぶられて亜衣は目を覚ました。横から麻衣に抱きすくめられていた。

悪夢から解き放ってくれたのは麻衣だった。

『お姉ちゃん、大丈夫？　すぐくうなされてたよ』

目尻に手をやると涙で濡れていた。

『ごめんなさい。起こしちやっただわね』

『そんなこといいの、お姉ちゃん。もう少しこのままでいてあげる』

麻衣は亜衣をさらにしつかりと、でも優しく抱きしめた。

『ありがとう、麻衣』

『亜衣ったら本当に甘えん坊さんなんだから』

麻衣は日頃自分がたしなめられていることを言い、双子の姉をからかう。

『こいつめっ！』

亜衣はそう言いながらも思わず笑みがこぼれた。麻衣の暖かな温もりに包まれ

ていると、先ほどの悪夢が嘘のように気持ち安らぐ。顔もわからぬうちに他界した母に抱かれているようだった。

『お姉ちゃん、このまま寝ていいよ』

意地っ張りな亜衣も妹の言葉に素直に従った。そのまま妹に抱かれ眠りについた。

悪夢はその後もしばしば続いたが、その都度、麻衣は優しく抱きしめてくれた。そのおかげか二ヶ月もすると悪夢は収まった。それでも、人間そのものの姿の邪淫王カーマに犯された経験は、彼女の男嫌いに拍車を掛けていた。

練習を終え、更衣室へ向かうと副部長の理恵が待っていた。今後の対応について話し合うためだ。他の部員たちは先に帰宅させてある。

弓道部となぎなた部は練習場所が隣り合わせということもあり、合同練習も行っている。部員同士も仲が良い。彩奈のことで部員たちが動揺しないように配慮する必要があった。

「彩奈ちゃんのこととは心配だけど、麻衣と一緒に大丈夫だよ」

理恵は努めて明るく話す。彼女は信用に足る人物だ。彼女には全て話してある。

亜衣は主将に任命されたものの、天神子守衆としてのお役目のため、度々部活を休みがちだった。理恵は副部長として亜衣の不在時も部員たちをまとめてくれていた。

麻衣からのその後の連絡によれば、彩奈は麻衣の手を握ったまま寝ているという。少しでも麻衣が離れようとするかと怯えてしまい電話も出来ない。自分がそばにいたので、今はそつとしてあげて欲しいとメールがあつた。

部員たちにはしばらく安静にする必要があるから、お見舞いは自粛し、メールも控えるように通達していた。無論、痴漢云々の話はしていない。

「うん、そうね。麻衣に任せましょう」

亜衣は気持ちを振り払うように思い切りよく弓道衣を脱いでいく。スポーツブラを脱ぐとプルンとバストがこぼれた。気心の知れた女同士とあつて隠す様子もなく、美乳を誇示している。

「相変わらず亜衣のおっぱいは形がいいよね。上向いてて、大きさも左右均等だしさ。なんていうかさあ、ちようどいい感じなんだよね。ねえ、少し大きくなつたんじゃない？」

「そんなことないよ、全然変わってない」

「嘘つき、大きくなったでしょう。亜衣のおっぱいウオッチを日課にしている理恵様の目は節穴じゃないよ。どうやったらそんなおっぱいになるの？ ねえねえ教えてよ」

そう聞く理恵の胸は控えめだった。つるぺたと言つてもいいだろう。

「弓道のせいじゃないかな。胸のまわりの筋肉が鍛えられたせいだよ」

タオルで汗をぬぐいつつ、素っ気なく亜衣は答えた。彼女の日課にはツツコミを入れる気にもならない。

「もうっ、亜衣つてば酷い。わたしだつて弓道部の部員ですう」

理恵は頬を膨らませてふて腐れている。そして彼女は日頃の涙ぐましい努力について何やらつぶやきだした。筋トレでしょ。牛乳でしょ。マッサージに……。

「違うつて理恵、膨らますのはほつぺたじゃなくて胸でしょ」

「キイイー、ほんと亜衣はDSなんだから！」

奇声を上げて、いよいよ理恵は壊れ始めたようだ。

胸なんて邪魔なだけだ。亜衣はそう思う。脂肪の塊に過ぎない。胸当てをつけているからさほどのことではないが、弓を構えるときに邪魔になるだけの存在だ。それを口にするとますます理恵は怒り出すだろう。武士の情けとしてやめておい

た。

ふと、目を離すと隣にいたはずの理恵がいない。あれ？ そう思ったときには背後から手が伸びてきた。

「亜衣のおっぱいゲット！」

不覚である。安パイのはずの理恵に背後を取られてしまった。両脇から伸びた理恵の手が、亜衣の胸を勝ち誇ったように掴んでいる。

「苦節三年。ついに理恵はやりました。日頃の鍛錬がついに実ったのです。練習相手になってくれた仲間たち。みんな喜んでくれるかな」

亜衣の不在時に、何を部員たちが練習しているのか不安になる言動である。

「理恵ったら、ふぎけないですよ」

「亜衣にスキがあるからだよ。いつもなら手をひねられて終わりでしょ。ねえ、亜衣、心配事があるならわたしにも話して。何でも自分で抱えたりしないで。わたくしたちだってみんな亜衣の力になりたいと思ってるんだよ」

「……………」

理恵は急に真剣な口調に戻し、背後から抱きしめながら言うのだ。ずるい。亜衣は思った。こんなときにそんなことを言うなんて。

「亜衣がわたしたちとは違うのはわたしにだって判るよ。技術の違いじゃないの。亜衣は的の先にわたしたちとは違う何か別のものを視てるもん。練習だつて真剣なんてレベルじゃない。まるで命のやり取りをしてるみたいで、本物のお待さんみたい。いつか、どこか遠くへ戦いに行つてしまひそうで怖いの」

理恵の指摘はまさに当を得ている。ふざけているようでも人を見抜く力があるからこそ、彼女は副部長に**抜擢**されたのだ。

「理恵、ありがとう。そんなことよりさ……」

「なあに？」

思い当たるところが何もないといった様子で小首をかしげる理恵。

「いい加減、胸から手を離しなさい！」

「ねえねえ、わたしの手をブラ代わりにしていいからさ。もうちよつとこのままでいようよ。わたし、どこまでも付いていくから」

理恵は亜衣の乳房の感触に魅了されていた。固さが残つていそう、驚くほど柔らかな乳房も素晴らしいが、何より肌理細かな触り心地が自分とは段違いなのだ。理恵とてうら若き乙女であり、バストサイズはともかく肌質には自信があった。しかし、亜衣の肌は明確に格上の質感である。見た目からして透明感のある

美しい肌だ。触れた瞬間、ふんわりとされていて陽炎かげろうを掴つかむようではかなげなのだが、すぐにほのかな温もりが指先に伝わってきて確かにそこに存在している。

天津家が天女の末裔であるとの言い伝えを理恵も耳にしたことがある。まことしやかに語られる伝承を信じたくなるような柔肌だ。触ってるだけで癒やされる。理恵は亜衣の天女肌の虜ひねになっていた。

「なにをキテレツなことを言ってるのあんたは！」

亜衣が理恵の親指を捻ひねり上げた。人間ブラを志願する理恵を引き剥がしにかか
る。

「痛いつて亜衣。ちよつお、待ってつてば。そこまでしなくても離すから。あと
少しだけ……」

親指に激痛が走りながらも理恵は未練がましく、残る指先を亜衣の美乳から離
そうとしなかった。

亜衣は自宅に帰宅した。神社に隣接した家屋は木々に囲まれている。境内の中
の一本には焼け焦げた後が今も残っていた。

その木を見ると思い出す。神社と屋敷が火災にあったあと、部員たちは後片付

けに協力してくれた。方々に飛び散った古文書や焼失を免れた霊具を整理してくれたのだ。野ざらしにならず、損傷を最小限に抑えられた。今では製法も失われた霊具、亜衣も会得していない秘法。部員たちはその本当の価値を知らずともそれがどれほど貴重な品々だったことか。うら若き乙女たちが顔を煤すすだらけに汚しながらも、嫌がりもせず作業してくれた。

玄関のドアノブに何か掛けてある。茶色の巾着袋だった。中身を開けてみると封筒が入っていた。

——亜衣様へ。

そう書かれた封筒の中身には固い感触がある。

扉を開け、家の中へと入る。「ただいま」呼びかけてみたが返事はない。麻衣はまだ帰っていないようだ。

家が焼失した後、立て直されたばかりの新しい家。麻衣と二人で住むには広すぎる家だ。前の家には二人の居候がいた。鬼麿とその従者である木偶の坊。二人は鬼獣淫界との戦いが終わると熊野山中へと修行へ旅立った。

淫魔大王へと化身したときの記憶は鬼麿にはなかった。住むべき家が焼失し、めつきりと子守衆が数を減らしているのにそのことをまるで覚えていない。それ

こそが彼の責であることを物語っていた。彼の手はいなくなつた子守衆一人一人の尻と乳房の形を克明に記憶している。二度とそれに触れることは叶わぬのだ。誰も何が起きたのか語ろうとしないのがもどかしい。

期するところがあつたのだろう。いつもなら駄々をこねる鬼磨が、むしろ木偶の坊を率先して去っていった。虚勢を張って歩く後ろ姿を亜衣は忘れない。肩を震わせながら、彼は決して振り返らなかつた。

こうして一人きりだとなんだか物寂しい。喧けんそう噪の日々が懐かしく思える。今では思い出となつた記憶に思いをはせつつ、封筒を開けた。封筒の中には便箋と梱包材に包まれたDVD-Rのディスクが入っていた。DVD-Rには表面に『#1』とだけ書かれている。

便箋には「明日、鷹冴線の最後尾車両でお待ちしております」とあり、列車の時刻が記されている。毛筆で書かれ、随分と達筆だった。強い不安を感じつつ、亜衣は居間に移動した。

家と神社の建て直しは子守衆の巫女の一人に任せた。祖母の代から金庫番として仕えていた信頼の厚い人物で、てきぱきと業者を指示し建築を進めてくれた。家具や調度品も彼女が寄進を募るなどして揃えてくれた。かなりの費用がかかっ

たはずだが、「亜衣様はそんな些事さじを気にする必要はございません」と教えてはくれない。居間に置かれたテレビも大型液晶パネルの立派なものだ。テレビは他にも姉妹の部屋に小型のものが置いてある。

亜衣はディスクをプレイヤーにセットした。

『三・人・娘♪ 夏の思い出』

やっつけで作られたような背景とともにポップな文字のタイトルが表示された。そして部屋の中で制服を着用して、立っている少女が映し出された。映っているのはあごから足までで、顔は分からない。夏の思い出というタイトルなのに冬服の白いブレザーを着ている。あざといまでに清純ぶりを強調した制服はアイドルが身につける衣装にも似ていた。

画面の少女が横を向いて手招きすると右側から別の少女が現れた。彼女もまた制服を着ている。黒い伝統的なセーラ服姿で襟に赤いラインが入り、紺のスカーフを付けている。最初の少女よりやや背が高いようだ。中央の少女は大きく両手を広げて右から現れた少女を迎えた。まるで久方ぶりの再開に喜びを爆発させたかのようにふたりは大袈裟に抱擁する。

微笑ましい光景がにわかには妖しい気配が漂い始めた。顔は映っていないが揺れ

る首の動きからキスをしているようだった。互いに背中に回した手で撫なであい、体を擦り合わせながら濃厚なキスをしているようだった。

少女たちがキスを終わると先ほどとは反対側に手招きする。また一人少女が現れた。彼女はグレーのブレザーに赤いネクタイの制服姿で中央の少女の左側に立ち、やはり中央の少女と抱き合いキスをする。左側の少女は三人の中でも背が低いせいか、あごの先までが映り濃厚にキスをしている様子が如実に覗えた。

これはアダルトビデオなのだろうか。女子同士で鑑賞会と称してAVを見る子たちもいるが、亜衣はそういったビデオは見たことがなかった。その種のビデオだと疑いを持つと、どうも制服の作りが安っぽいことに気がつく。コスチュームとして楽しむための衣装のようだった。

画面にテロップが流れる。

【いやあ、いい娘たちが撮れました。三人ともとっても可愛いんですよ。え？顔が映ってない。これからですよ。お楽しみは。是非、最後まで見てくださいね】

軽薄な調子のテロップが流れている間に中央の少女は一人がけのソファへ座った。白いブレザーにピンクのリボンが可愛らしい。相変わらず顔は映さないが、先ほどよりあごの形や髪型が見て取れるようになった。少女の髪は肩より少し短

いボブヘアだ。

(麻衣に似ているかもしれない。まさか……)

制服こそ天神学園のものではないが、ショートボブの髪型、あごの輪郭や首筋が麻衣に似ているように思える。

少女はソファアに座り、ゆっくりと足を開いていく。左右の少女がその足をソファアの肘掛けに載せた。紺のラインが入った白いスカートを手で押さえて、下着が見えないようにしている。ぎゅつと押さえる様がむしろ扇情的に誘っていた。清純な制服だけに、ぎりぎりまで大胆に飛び出した太ももの発育ぶりが強調され、カメラ越しに見る者にその中心地を期待させる。

右側に位置する少女が白いブレザーのボタンを外す。右側の少女が一つ外している間に残りの二人はキスをしている。そして今度は左側の少女がボタンを外し、ペアを変えてキスをしている。キスを繰り返しながら、ブレザーのボタンが外されていく。ブレザーを脱がされるとグレーのスクールベストが現れた。

彼女たちは脱がす過程を楽しむために、わざわざ冬服の制服を着たようだった。前開きのベストのボタンを二つ外すと、そこへ手を伸ばし胸をまさぐり始める。もう一人の少女はソファの後ろへと回り、そこへ座る少女の顔を上げさせ、キス

をし始めた。

カメラがそこにフォーカスを当てアップになる。上から顔を重ねる少女の髪に隠れて顔は見えないがキスをしている二人の唇が映し出されている。少女たちは口を重ねるだけでなく舌を絡ませ合っていた。

(こんなこと麻衣がするわけがない)

女性同士の濃厚なラブシーンに顔を赤らめながら、亜衣は自分の思い過ごしであることを祈る。画面には再びテロップが流れた。

【こっちの背の高い子はNちゃん。三人の中では一番のお姉さん。そしてちよつと髪の長い女の子がAちゃん。彼女はまだバージンなんだって。そしてソファに座ってる子がMちゃん。大学院生の彼氏に無理矢理おもちゃでバージンを奪われたんだそう。それも木馬責めをされながら。こんな可愛い子の処女をおもちゃなんかで奪う男がいるなんて許せません。それ以来、男が嫌になって女の子に走ったみたい。彼女たちは同じ学校の先輩後輩同士で、三人で愛し合ってるそうです】

AとMというイニシャルを聞いて亜衣はハツとする。彩奈と麻衣……。Nという娘には思い当たる人物がない。卒業生だろうか。

【実は三人からお願いされて撮影しているんです。なんでもこの夏の思い出にビデオを撮って欲しいとか。いやいや最近の女の子の考えることは分かりません。撮影にあたり条件がありました、決して口外しないこと、顔は撮らないこと、撮影した映像は没収することの三点です。でも頼んだ相手が悪かった。隙を見て動画データをコピーさせていただきました。これは彼女たちには内緒にしてくださいね】

これはアダルトビデオではなく、私的に録画した映像が流出したビデオのようだ。そんな区別は亜衣には分からず、ただいかがわしいビデオであるということだけがはつきりしている。

少女Mはブラウスのボタンも外され、カップを握りしめられている。よく見れば既にブラの中に手は入り込み直接乳房を愛撫されていた。AとNに代わる代わるキスをされ、Mはくぐもった声を出している。感じている女の声だ。

これ以上は限界だった。亜衣はプレイヤーを停止した。見ていたのは十五分程度だろうか。わずかな時間にも関わらず、のどがカラカラに渴いている。べつとりと汗をかいていた。

亜衣は自室でベッドの上に座っている。家が焼失し家財が無くなったこともあ
るが、質素な部屋だ。女性らしいものは化粧台ぐらいしかない。ベッドの上で膝
を抱えて亜衣は丸まっている。

先ほどのビデオ映像はショッキングだった。麻衣は時々軽いことも言うが、根
はまじめなしつかりとした子だ。鬼獣淫界の陵辱を受けるまで純潔を守ってきた
身持ちの堅い子だ。

供に死線を乗り越えた妹を亜衣は誰よりも信頼している。麻衣が選んだのなら
たとえ相手が女子でも構わない。だが、相手が二人というのはどういうことか？
相手が同性であれ、唯一人に愛情を注ぐべきではないのか？ さらに睦^{むつ}み合
う姿を第三者に晒すなど、そんな軽はずみなことをするとはとても思えない。し
かし、Mという少女のキスをしているときに映った顔の輪郭や髪型は麻衣そつ
くりだった。

（絶対に違う、麻衣じゃない）

その思いは祈りにも近いものだった。風呂に入り、服を着替え、さっぱりとし
たが、頭の中は混乱したままだ。どうしたらいいのだろう。思いを巡らせている

と携帯からメールの着信を知らせる音が鳴った。

『お姉ちゃん、まだ心配なので今晚は彩奈ちゃんの家に泊まります』

メールにはそう記されていた。麻衣へ電話してみたが留守電になり繋がらない。仕方なく電話をくださいとだけメッセージを残しておいた。

ふと、Mの指先が目には浮かんだ。あの指先の動きはもしかして……。天神子守衆には秘密の伝心術があった。天津流伝心術と呼ばれるその術は、卑劣な手段を恥とも思わぬ淫らの敵に捕らわれた場合に備えたものである。テレパシーのような便利なものではないが、指先や唇、まぶたなど、体のわずかな動きで相手に言葉伝えることが出来る符牒ふちようだ。

手や口などを拘束された場合でも意図を伝えられるよう様々なバリエーションがある。子守衆でもその全ては一部の者にしか伝授されていない。存在すら秘匿とされている術の一つだ。

亜衣は居間に戻り、DVDを再生した。やはりMはスカートを押さえる手で符牒を送っている。伝心術を知るものでなければ気づかない微妙な動きで、指先で何かを伝えようとしていた。

——サ・イ・ゴ・マ・デ——

指先はそう告げている。最後まで見ろということか。天津流伝心術を使うのであれば、Mは麻衣なのだろう。そしてAは彩奈だ。無理矢理、少女たちがペツティングをやらされているようには見えない。何らかの弱みを握られているのかもしれない。

亜衣は意を決して続きを見た。

Mはスクールベストを脱がされ、ブラウスのボタンも次々に外されていく。ブラのホックも外されて左右の少女から乳房を愛撫されている。耳をなめ回すNが耳元で何かを囁くと、Mはスカートの裾を上げていく。ブラと同じ白いパンティイが現れた。

サテン地の下着はあまりにも輝きすぎて、純潔の白であるにも関わらず、どこか淫靡さを漂わせている。黒い縁取りと刺繡もその誘い込むような妖しさの要因か。黒い飾り糸でバツテンが三つを繰り返すデザインの刺繡が施されている。その位置が低すぎる。一番下のバツテンは体のほぼ真下だ。Mがしているようにお尻をせり出さないと見えない位置にある。それはちょうど局部の上であり、ま

るで男が求めてやまない秘めたる場所を示すようだった。

Mの指がパンティへと伸びる。指先は秘部の刺繍をなぞるように動き、その位置が正しいことを証明している。三つのバツテンの上をジグザグに触り性器全体をもみほぐす。

指先は一番上のバツテンを熱心に弄り始めた。右上から左下へ、左上から右下へ、繰り返してMの指先がバツテンを描いた。刺繍をなぞる指先が交点で止まっては、軽くそこを押さえる。声帯と連動するスイッチであるかの如く、交点を押さえつけるたびにMは小さな声を出した。

指先は三つの交点を結んで縦に動き、次第に強く擦りつけていく。下から上へと指をなぞっては、パンティの上に縦皺を残す。三つのバツテンの上にくつきりとラインが引かれていた。Mの手首には、天津家に代々伝わり、変身のための秘宝でもある羽衣は巻かれていない。男に奪い取られたのかもしれない。

麻衣が裏山のお気に入りのお気に入りの場所で自慰行為をしているのを、偶然見てしまったことがある。

夕闇のなかで秘めた欲望を解放する彼女の横顔は、我が妹ながら美しかった。決していやらしいなどとは思えなかった。盗み見るつもりはなかったが、亜衣は

その姿にしぼし見とれた。

性欲があるのは健康な人間として正常なことだ。麻衣の行為をとがめる気など全くない。亜衣とて体の欲求が昂ぶるときだつてある。それでも亜衣は自慰をしたことはなかった。ムラつとした気分が立ち上つたときでも、精神を集中すればスツと体が落ち着くのだつた。

そんな亜衣でもMのオナニーは目の毒だつた。伝心術を見逃さぬために画面から目を離すわけにはいかない。伝心術は敵に悟られるわけにはいかないから、僅かな動きでしかないのだ。部外者ではスローモーションで見ても何も気づかない。指の動きに注視しているためにMの指遣いをじっくりと見てしまう結果となる。Mがくぐもつた声をあげると、裏山で見た麻衣のうっとりとした表情が重なつた。画面に顔が映らないことが却つて想像力を喚起している。

亜衣は否応なくその映像に引き込まれていった。体が熱くなるのを感じた。

風呂から出た亜衣はパステルカラーのキャミソールとショートパンツに着替えていた。可愛らしいドット柄のコットン素材の上下セットである。ブラはつけていない。

屋敷から男共が退去し、暑い夏ということもあつて、亜衣は夜間は薄着で済ま

せている。「お姉ちゃん、はしたない」麻衣が居合わせたらそう言われかねない格好だ。あの子は時折間が抜けているわりに、変なところが妙に生真面目なのだ。乳房のほてりを確かめるように右手が伸びた。性感の開発されていない乳房は、キャミソールの上からでも、握りしめるとピリッ痛みにも似た刺激がある。だがそれは痛みではない。もう一度その刺激を確かめるように乳房を握った。

（おっぱいだけ——。それ以上は絶対に我慢）

自分に禁を課し、亜衣は己の乳房を愛撫する。乳輪をさするだけで乳頭が首をもたげていくのが分かる。人差し指が乳首の変化を何度も確認する。キャミソールを突き上げる突起を転がすと、乳首はさらに自己主張し甘い電流が走った。

テレビの中ではMはより自慰行為をエスカレートしていく。何度も指をなぞったパンティにはくつきりと割れ目が浮かび上がっていた。割れ目の上端を掘り起こすように指が動き、やがてそれが円運動に変わった。またクリトリスを弄っている。うっすらと下着の上に突起が浮かび上がった。指は再び縦の運動に変わっていった。縦運動にクリトリスを巻き込み、刺激している。

Mは自慰に耽^{ふけり}りつつも、余人にはそれとは分からぬ自然な動きで指先のサインを混ぜている。余程慎重になっているのか、時間を空けて符牒を送る。いつ送ら

れるかわからない伝心術を見落とさないよう、亜衣は注意深く画面を見つめた。Mは割れ目の中に指を埋め始めた。グリグリと指を押しつけると下着に染みが出来ていた。

(何もこんなにいやらしくしなくても……)

亜衣がそう思ってもMの行為は止まらない。下着の染みが広がり、Mは下着の中に直接手を入れた。鮮明に記録された映像は下着越しにも、手淫の動きを事細かく伝えてくる。下着の上からしたのと同じ動きで割れ目を、クリトリスを弄っている。直接の刺激は強いのか、先ほどよりも声が上ずっている。

——最近撮られた映像だろうか？

そう思えたのは少女の肌があまりにも艶めかしいからだ。開脚姿勢の内腿の肌が白く眩^{まぶ}しい。内から光っているようである。ただ美しいだけでなく形容しがたいう色香が加わっていた。女として目覚めた、そうとしか言えない色香である。これほどの変化と一緒に暮らす亜衣が気づかぬわけがない。Mが麻衣であるなら、ごく最近、彼女の身に何かが起きたのだ。

Mは秘部の中に指を突き入れたようだ。指の出し入れが次第に速まる。パンテイの隙間から黒い茂みが見え隠れする。Mの指の動きが更に速くなる。その手の

動きが唐突に止まった。左右に開いた太ももが痙攣^{けいれん}している。亜衣は両手で左右の乳房を揉みしだきながら、その一部始終を見ていた。

Mはソファアーに横向きに寝ている。ゆったりとしたソファアーだが一人用のソファアーに横になるのは無理がある。肩を肘掛けに載せ、頭がはみ出している。その頭を支えてやりながらNがキスしている。Nの頭でMの顔が隠されその表情は窺えない。反対側の肘掛けには腰を載せていた。Aは下着を脱がすと、右足を背もたれに引つ掛ける。大きく開脚させながらスカートの中に顔を埋めていった。

女三人は本格的なレズプレイへと移っていく。NとAはそれぞれ口と股間を中心に責め立てながらブラウス、スカートを捲^{まく}り上げながらそれ以外の箇所へも舌を這わせていく。

制服少女のなんともいやらしい光景に、亜衣の右手が股間へと伸びた。亜衣は己の行動にはたと気がつく。すんでのところ右手は移動先を変え、太ももを握りしめてこらえる。その我慢も長くはつづかなかつた。自分の体に変化が起きている。体が熱い。脳の一部が火照りの正体を確認しろと命じている。再び右手が

股間へと向かっていく。

(少しだけ……)

右手で股間をなぞると熱を持っているのが分かった。これ以上はいけない。亜衣は強い自制心で右手を太ももへ戻した。

画面が切り替わりMの股間が映し出された。アップで接写されたそこにAの舌が這いずり回っている。モザイクはかかっておらず、ありのままの姿が映っていた。

麻衣とは一緒に風呂にも入るが、あそこをのぞき合うようなことは姉妹といえどすることはしない。これが麻衣の秘所なのだろうか。中心部が光り、蜜を滴らせている様をカメラが捉えている。

股間だけが映ったこんなシーンに伝心術が隠されているわけがない。それでも早送りをしようという考えは、今の亜衣からはぽっかりと抜け落ちていた。妹に間違いないであろうMの局部をまじまじと見つめている。亜衣の右手は時折、股間を弄っては太ももに戻すという動作を繰り返していた。レズプレイを見つめながらその間隔は次第に狭まっていった。

AとNはソファアの左右の肘掛け部分に腰を落とし、座席に片足を置いている。スカートも下着も脱ぎ捨て剥き出しになったAの股間にMが顔を寄せている。

Mは床に膝をつき、カメラにお尻を向けており、顔は映らない。

Nが催促するように腰をくねらすとMはNの股間へと移動し攻め立てた。Mは少し舐めては二人の間を行き来する。何度目の往復だろうか、Mの口がNを離れ、Aへと向かうと何ともやるせない声をNは上げ、自ら秘所を弄りだした。AもMの口がNへと移動すると手淫を行いだす。

二人の哀切な声を聞き、Mもスカートをめくり上げた。丸出しになったお尻をカメラへ突き出し、股の間から手を伸ばし、陰部を弄りだした。カメラがアップでその様子を捉える。

少女たちは三者三様にオナニーを行う。Aはクリトリスを中心に優しく、Mは膣口をねつとりと、Nは膣の中に深々と指を突き刺し、激しく自慰を行う。

亜衣の右手はいつしか太ももに戻ることなく、股間に張り付いていた。Mが着ていたパンティのバツテンと同じ位置を優しく弄っている。下から上へと指でなぞっては、バツテンの中心それぞれで指を遊ばせている。

一番上のバツテンはクリトリスの位置にある。割れ目の内に潜んでいても亜衣にとつては敏感すぎる尖^{とが}りだ。下着とショートパンツの上からだど刺激が丁度いい。

二番目のバツテンは小陰唇の一番肉厚な所にある。小ぶりで楚^そ々^そとした亜衣のそこは淫靡な映像を見た影響からかほんの少し顔を覗かせていた。複雑な皺を絡ませてぴったりと閉じた花卉を上からさすると、少しずつほどけてなんだか怖くなる。

三番目の最も下に位置するバツテンは割れ目の下端にある。そのほんの少し上に彼女の入り口があるはずだ。そこをぐりぐりと押すと内部で湿ったものがよじれ合うような感触がある。

三カ所のバツテンを彷彿^{さまよ}っていた亜衣の指が一番上のバツテン位置を中心に触りだした。バツの字を描き、あるいは円を描いて指を戯れさせる。

「うんっ……うむんっ……はあ……」

テレビの中の少女たち、三人のそれぞれ違う一人遊びを観ながら、亜衣は初めてのオナニーに没頭していた。

第二章 痴漢淫戯

翌日、亜衣は鷹冨線の列車が立ち往生した現場へと向かった。

——夕・カ・サ・エ・セ・ン——

伝心術の符牒ふちようはそう示していた。

手紙で指定があつた待ち合わせ場所も鷹冨線だ。待ち合わせの指定の時間は午後。午前中の間に調べれば、何か分かるかもしれない。

昨晚はなかなか寝付けなかつた。あんなDVDを観たのだから当然だろう。シャワーを浴びて気分を入れ替えようとしても、まぶたを閉じれば女たちが絡み合うあの映像が浮かび上がった。日頃は極力使わないようにしているエアコンの冷房を入れ、どうにか寝たものの眠気が残っている。

理恵にメールを打ち、今日は部活を休む、しばらく休むことになるかもしれないと連絡しておいた。亜衣が急用で部活を休むのは珍しいことではない。祖母を亡くした姉妹が、神社を切り盛りしなければならぬことは部員たちは皆、承知している。理恵からも「こっちは任せといて」とすぐに返信があ

った。

列車の立ち往生現場は小高い山の中腹で木立の中だった。線路付近の木が切り倒され、救出のため通路を形成している。この一帯は昨日、既に子守衆配下の者に調べさせていたが、目立った異常は発見されなかった。人間界の事故だと考えられるとの報告だった。しかし、自分の目で確かめなければ分からないこともあるだろう。

子守衆はこの近辺でまれに発生する神隠し事件にも協力しており、警察にも顔が利く。関係者の証言によると、立ち往生した原因は変電設備の故障によるものと断定されたとのことであった。踏切や、信号機故障も、変電設備の不調に端を發して起きたということである。乗客からはあまり有効な証言が得られていない。暑さで朦朧もうろうとして記憶が曖昧なのだ。

亜衣は現場を見て回ったが、目立った異常は確認できない。鬼獣淫界の手の者が残す特有の瘴気も感じられない。

頭を整理して亜衣は思索に耽る。

麻衣が天津流伝心術を使ったのは敵に知られることなく、亜衣に情報を伝えたかったためであろう。何らかの弱みを握られ言いなりに為らざるを得な

かったのか？ Mは積極的に女同士で愛し合い、強制されているように思えなかった。

では敵とは何者か？ 鬼獣淫界の者どもがそんな回りくどいことをするようには思えない。奴らならばこれ見よがしに麻衣を陵辱する映像を送ってくる筈だ。

ならば人間か。あのDVDを世間に流出させるという脅しなのだろうか。男と女の性の欲望は複雑怪奇だ。天神に仕える巫女として、清純で有り続けようとする巫衣には、到底理解できないことも多い。時に人間は己の性欲を満たすために、淫敵以上の狡猾さで女性を襲うことがある。守るべき存在だが、欲望のままに行動する邪鬼などよりもある意味厄介な相手だ。人間相手では淫らの気配を感知することも出来ない。

一昨日の会合でも忠告を受けていた。「良くない噂を耳にした」老齡の神官は言った。

敵の領袖、鬼夜叉童子と共に鬼獣淫界を封印したものの、地上には多くの邪鬼、淫鬼が残存していた。激しい戦いで多くの犠牲を出した天神子守衆だけではどうにも戦力が足りぬ。そこで報奨金を出し、フリーの退魔師にも協

力させた。

残党狩りほど楽なものはない。一体でも油断ならぬ力を持つ邪鬼も、鬼獣淫界からの力の供給を絶たれ、指揮官もいないのでは力は半減する。単調な攻撃に終始する邪鬼どもを退魔師たちは苦もなく倒した。これは上位の存在である淫鬼とてさして変わらなかつた。知力すら低下したのか、本来の狡猾さも鳴りを潜め、淫鬼は面白いように罠に掛かつて討ち取られていった。退魔師たちは大いに狩りを楽しんだ。

街の周囲から淫敵が一扫されたあとも一部の退魔師たちは街に残った。一方的な殺戮をほしいままにし、しばらく遊んで暮らせるだけの金も手に入れた彼らが次に望んだのは肉欲だった。退魔師の一人が退屈しのぎを兼ねて新たなゲームを提案した。

美人姉妹の誉れ高い、亜衣、麻衣の姉妹を誰が墮とすか競おうというのだ。なんと提案者は女の退魔師だという。ビデオ映像のNの妖しい指遣いが脳裏に浮かんだ。

退魔師は職業柄、酸鼻を極める陵辱現場に見慣れている。朱に交わればと
いうが異常な性癖を持つ者も少なくない。人を惑わす術も長けている。戦闘

に於いては無類の強さを発揮する天津姉妹としても油断ならぬ相手だ。
ふと、足元に目を落とした。

地面の中に紙が埋まっているのが目に留まった。掘り起こしてみると、麻衣宛のファンレターだった。封筒は泥まみれだが、中身は汚れていない。隣の学校の生徒から頂いた手紙だろう。女生徒からのようだった。

麻衣への暖かい応援メッセージが可愛らしいイラストと共に綴つづつてある。妹はどこで何をしているのだろうか？ 亜衣と麻衣の双子姉妹は不思議な力で通じ合っている。だが、麻衣の気配は臃おぼろ氣いげにしか感じ取れない。麻衣がこの町に居るのは確かなようだがその場所まではわからなかった。

他に手掛かりがない今、待ち合わせ場所に行くほかになかった。

手紙の指定通り、亜衣は鷹冨線の最後尾の車両に乗り込んだ。私鉄のローカル線である鷹冨線は近隣に住む市民の足ではあるが、目玉となるような観光スポットやターミナル駅があるわけでもなく、利用客は多くはない。この車両にいる乗客もたかだか二、三人程度しかいなかった。

三両編成の列車はカラーリングこそ塗り揃えているものの、他の鉄道会社

から払い下げられた車両で型式も座席の配列もばらばらである。

乗り込んだ車両はボックスシートタイプの座席だった。座席は空いているが亜衣はドアの近くで立つことにした。その方が辺りを見渡せる。

亜衣は天神学園の制服姿で腕組みをして立っている。制服を着たのは男を惹き付けるであろうからだ。下着はスポーツタイプで、靴も普段部活で履いているトレーニングシューズである。いざとなれば戦うこともできる構えだ。ほどなくして隣の車両から中年の男がやってきた。男は座席を探すような素振りで見ているが、そうではなく別のものを探しているであろうことを亜衣は察知した。

(この男だ……)

果たして亜衣の睨んだとおり、男は大半の座席が空いているのに不自然にも亜衣と同じドア付近で立ち止まった。

亜衣はドア横の手摺りに掴まり、あえて男へ背を向けて、隙を作る。男は亜衣の背後へと近づくと「はごろも」と囁いた。何かの合い言葉だろうか。亜衣が身動きしないのを了承と受け取ったのか男は手をスカートに伸ばした。プリーツスカートの腰の部分に手の甲を当てる。

手の甲がゆつくりと降りてくる。尾てい骨まで降ろすと、半握りの手が中指を中心を開いていく。尻の割れ目に中指の関節が軽く触れているのが分かった。手の甲を上下させ、尾てい骨をさすり、尻の谷間に中指の関節を埋めるように動かす。

男は指を伸ばしきると、ゆつくりと手を回転させた。尻との接触点が中指の背から人差し指の背へと変わり、さらには人差し指の側面を触れさせる。いつのまにか人差し指の腹でお尻をさわられていた。

男は脱力させた腕の指先だけに明確に意志を持たせ、亜衣の尻をソフトタッチしている。尻に当たる指先が二本に増えた。中指の指先も触れている。この頃には男の手はほとんど回転を終えている。手の甲での様子見から、手の平での本格的な接触へと移行しようとしている。

——痴漢だ。それもかなり手慣れている。

男は手を完全に回転させると、手の平を使い、はつきりと触ってきた。スカートの上から亜衣のお尻を軽く握り、尻の形を確かめる。

「あんた、天津亜衣だろう。まさか、あんたが応募してくれるなんてなあ」
男がひそひそ声で話しかけてきた。男は軽く腰を落とし、スカートから伸

びる脚へと手を這わせる。亜衣のスカートは短く裾上げされており、鍛えられた美脚を披露していた。

男嫌いの彼女が校則違反スレスレ、いやギリギリアウトのミニスカートを穿くのは、当然ながら男に脚を見せつけるためではない。動きやすいことが大きな理由だ。本来自由奔放な気質の彼女が、過酷な戦いの運命に宿命づけられていることへの、ささやかな反抗心の現れなのかもしれない。

「神社の巫女さんなんて、退屈しちゃうよな。刺激が欲しい年頃だ。優しくしてあげるから、今日はおじさんに身を任せるといい。君はじつとしていれればいいからね」

男は亜衣のことを知っているようだ。天神様の奉納弓試合でも見事な腕前を街の人々に披露し、その後の奉納祭でも巫女姿で人々の目を和ませる天津姉妹は、祭りの華として欠かせない存在だ。この地域の有名人とも言える存在だから、亜衣を知っていること自体はさほど珍しいことでもない。

「我慢できなかったらおじさんの手を押さえるんだ。そうしたらやめてあげるからね」

男は慎重な手つきで魅惑の太ももを撫なで回す。その動きがだんだんとしつ

こく、遠慮のないものに変わつていく。男の手が上昇し、再び尻へと向かう。太ももを滑る男の手がスカートの中へ侵入しようとした。

男の出方を窺い、我慢を重ねていた亜衣の手が動いた。サッと男の親指の付け根を握るとひねりを加えた。

「ツツウ、ちよつと、待つてよ。痛いって」

男は痛みを耐えながら小声で呻く。親指一本を握っただけで、亜衣は男の動きを完全に制した。

亜衣は男に向き直る。手の長い痩せ形の男だ。年齢は四、五十代だろうか。中年の男は痴漢行為を取り押さえられ、ばつの悪そうな顔をしている。次の駅で男と共に降りた。

電車が過ぎ去るのを待つてから、亜衣は男の手を離し解放すると、平手を男に見舞った。バシンツと強烈な音が、他には誰もいないホームに響く。

「いきなり何するんだ、このアマツ！」

取り押さえられ神妙にしていた男が豹変し、突っかかってきた。

降りた乗客が皆、改札に消えたことで強気を取り戻したのであろう。浅薄なことである。

もう一撃。バシンッ！ 今度は反対の手で平手をお見舞いした。

「お、俺が悪かった。この通りだから。なっ、許してくれよ」

二発目の平手で男の心はあえなく折れた。情けない声を出して男は平謝りをする。

「あなたは何者だ。知ってることを全て話しなさい」

亜衣は冷然と男を問い詰める。

「なんだよ。君はサイトの応募者じゃなかったのか。どうも話がウマすぎると思っただよ。おじさんは源造。蜘蛛の源造ってな、結構この筋じゃ名が知られてるんだ」

「何？ サイトって」

見るからに小物臭がする男の名には関心を示さず、亜衣は詰問した。

源造が説明する。サイトとは「お触りさん」と呼ばれるウェブページのことだ。そこにはお触りさん——つまり痴漢行為をする男たちが登録されている。女性はそのプロフィールを見て、プレイ条件を出し応募するのだ。亜衣

には信じられないことだが、女性の利用者は多いらしい。

「意外に思うかもしれないけど、安全だから結構気軽に応募してくるもんだよ」

源造は言う。男の審査は厳重で強姦など重い性犯罪歴があるものは入会できない。高額の登録料も取られる。それに対して女性は匿名かつ無料で登録できる。

電車の中では触る以上のことはそうそう行えない。逮捕されるリスクを冒してまで、行き過ぎた痴漢行為をする男はそうそういない。後で女性から評価されるシステムになっており、痴漢は女性のリクエスト通りに触る。あくまでも女性本位で決定権は女性側にある。触り方が気に入らなければ、女性はその数メートル場所を離れればいい。評価が低すぎたり、リクエストから余りにも外れたことをすれば男は即刻除名されてしまう。行きずりの男とホテルに行くよりは安全だ。

優良な痴漢という表現は変だが、そういつた男たちが厳選されていた。決してがつついたりしない。世の中には精液をかけたり、スカートを切りつけるといった身勝手な行為をする男もいるが、そのような男も皆無だ。女性側

は基本的に背後から触られる。顔を見る必要はないから、顔や体型など好みの許容ラインも低い。性行為はしたくないが、ちよつと刺激が欲しいという女性には打って付けなのだという。

「それにな、最近ほとんど男との経験がない女の子の応募も多くてよ。これが初心で可愛いんだ」

源蔵は付け加えた。彼氏と初めての一夜を過ごす前に自分の性感を磨くためらしい。

「マグロ扱いされて、嫌われたくないんだそうだ」

源造はそのときのことを思い出しながらニヤニヤ言う。

エッチのときに感度が悪くて彼氏に幻滅されたくもない。でも自分では触るのも怖くて自慰の経験もないという女性は少なくない。そこで痴漢に触ってもらい性感を開発してもらおうおうというのだ。

亜衣は自分も昨晚初めてオナニーをしたこと思い出しながら源造の話を聞いた。

「希望があれば終わった後に助言までするし、アフターケアもばっちりだから、口コミで広まってな」

いかにも好色そうな本性を露わにした顔で、源造がアピールする。その顔はいつしか自慢気になっていた。

「わたしがなんでそんなところで痴漢を応募したことになるんだ」

「あんたは別のルートで特別に紹介があつてな。深窓の令嬢だからって飛びついたらんだけどよ、とんだじゃじゃ馬だったな」

バシンッ！

源造が口が滑ったことに気がついたのは、亜衣の平手が飛んだ後だった。赤く腫れた頬を押さえ、「ちよつとは加減してくれよ」と言いつつ源造が携帯を差し出す。

そのメールには確かに女を紹介することが書かれている。差出人は「溶岩魔神」となっていた。

「この「溶岩魔神」って男のことを教えなさい」

源造から携帯を引ったくりながら亜衣は命令する。

「何も知らないよ。こういうところではお互い本名なんて明かさないものさ。メールアドレスだって捨てアドだから調べても無駄だよ」

他のメールも見てみるがネット上のハンドル名しか表示されない。それで

も手掛かりはないかと調べているとメールの着信音がした。

『電車に乗れ。その男に体を触らせてやるんだ。言うことを聞けば行き先を教えよう。そこにはお前が欲しいものがあるはずだ』

メールにはそう書かれている。

亜衣が痴漢されている姿を高みの見物をしようというのか。卑劣なメールの差出人に亜衣は唇を噛む。

もう一度着信音が鳴った。今度は亜衣の携帯だった。差出人のアドレスは長つたらしい。捨てアドだろう。こちらは画像だけが添付されている。源造に見せぬよう手で覆って画像を確認した。全裸の女が体を横たえている。顔は写っていない。手首にこより状によられた白い布が結ばれている。麻衣に伝承された天津家の羽衣に間違いあるまい。

亜衣は辺りを見回した。反対側のホームも含め誰もいない。源造は何も知らないようだ。メールの差出人に麻衣は捕らえられているのだろうか。

ちょうど電車がやって来た。亜衣と源造は電車に乗り込んだ。

亜衣と源造は電車に乗るとボックスシートに座った。座る前に確認したが他の乗客は数人ほど。老夫婦と熟睡した中年女性がいるぐらいで不審な人物は見当たらない。

「さっきの奴に脅されてるのかい。面倒に巻き込まれるのはご免なんだが」
亜衣を窓側の座席に押し込めた源蔵は、早速肩に手を回してくる。

「お前には関係ない。いいから好きなように痴漢でもするがいい」

「そうかい、じゃあお言葉に甘えて。さあ、天神様の巫女さんはどんな体してるんだろうな」

「直接、下着の中を触るのはなしよ。あそこも触ったらただじゃ済まないから」

亜衣は源造に釘を刺した。

「条件が厳しいんだな。オーケイ、大丈夫だよ。こう見えてもおじさんは紳士なんだから。亜衣はじつとしていれればいい。怖くないからね」

源造は馴れ馴れしく呼び捨てで亜衣を呼ぶ。この男は色事となると妙に優しい口調になるようだ。下心丸出しの声も亜衣に取っては嫌悪の対象なのだが、この男は何も分かっていない。

源蔵が淫手を伸ばしてきた。

源造の手つきはしつこい。ボックスシートで他の乗客から死角になっているため、のっけから遠慮なく触ってくる。手があちこちから伸びて亜衣にボディタッチしてきた。蜘蛛の源蔵の異名通り、無数の手があるかのようだ。隈くま無く制服少女の感触を確かめると、手の動きも落ち着いてきた。

亜衣に横から抱きつき背中から回した手で胸を握りしめる。関節が柔らかいのか、ぴったりと隙間なく亜衣の体にまとわりついてきた。少女の体は男にとってどこも魅力的なのだろう。巻き付かせた腕も駆使して均整の取れた背中に擦りつける。

もう片方の手はスカートの上から柔らかかな太ももを触っている。触りながら亜衣の脚を横に座った己の脚へと引き寄せ、体を密着させる。女体を全身どこもかしこも愛でようとしていた。

「亜衣がこんなことさせてくれるんだ。よっぽどの弱みを握られてるのかい？ おじさんが相談に乗ってもいいんだよ」

源蔵は猫撫で声で呟いた。耳元に生温かい息を感じる。メールで送られた画像を見たときの亜衣の顔を源蔵は見逃さなかつたのだろう。うかつだった。

さりとして痴漢に相談するほど落ちぶれてはいない。それ以上詮索するなと、亜衣は源蔵を睨みつけた。

「おお、怖い怖い。そんな目で見つめられるとゾクツとしちやうよ」

屈強な男も黙らせる亜衣の眼光も、極上の獲物を前に興奮する源蔵には逆効果だったようだ。こんな強気な女を触り放題できる機会はそうそうないと鼻息を荒くする。痴漢サイトといっても同意の上で行うのでは、本物のカタルシスには及ばない。

「少しぐらいなら抵抗したっていいんだよ。こんなことされるの嫌なんだろう」

亜衣の横に張り付いた耳に息を吹きかけながら、密着した体を擦り寄せる。肢体にまとわりつかせた手だけでなく、腕全体を使い制服の上から刺激を送ってくる。そうしながら美少女の柔らかな感触を源蔵は満喫していた。責めの合間には、しきりに源蔵は亜衣の匂いを嗅いだ。微かに漂う美少女の芳香を愉しみながら、獲物の微妙な変化も匂いで嗅ぎ分けているようだ。どこか動物的な嗅ぎ方が気色悪い。

源蔵は持てるテクニクを駆使して亜衣の体を触っているが、亜衣は涼し

い顔のままだ。「フンツ、下手くそ」とでも言うかのごとく、醒めた目で正面を見ている。何をされても石のように無反応を決め込んでいる。

「こういうやり方は嫌いかい？　じゃあ攻め方を変えるか」

源造が座席の下へ潜り込んだ。

亜衣の右足の靴を脱がすと白いソックスの上から舐めだした。

「この匂い最高だ」

源造は美味そうに匂いの染みこんだソックスを味わっている。半脱ぎになったソックスを噛み締め少女の足の匂いと味を満喫している。痴漢の範疇から外れた行為だが、体の遠い部分に源蔵が向かったことでそのままにさせた。

靴下を脱がすと直接足の指をしゃぶりだした。

「指の形も実にいい、特にこの人差し指の形ときたら」

源造は長めの亜衣の人差し指が特に気に入ったようだ。ちゅぱちゅぱと舐めている。

（こいつ、変態だ……）

亜衣は軽蔑の面持ちで源造を見下ろす。フェチズムという言葉は亜衣も知っているけれども、あまりにも変質的過ぎる。女子同士でも鎖骨フェチ、の

ど仏フエチなど話題になるが、この男に比べれば可愛いものだ。踏みつけてやろうかとも亜衣は思ったが、むしろ源造は喜びそうなのでやめた。

源造は左足も同じように舐めた。手でかかを握りしめながら足の裏にも舌を這わす。

厳しい修練で亜衣の足の裏、特に親指の根元などは特にざらざらになっている。年輪のように刻まれた足の裏のざらつきを舌で感触を味わっている。ただ美しいだけの少女ではないことを知り、ますますうつとりと恍惚こうこうの表情を浮かべている。

亜衣は足の先がぽかぽかと暖かくなるのを感じた。熱心に撫でさする男の指のマッサージ効果と、男の口の中で啞えられたことによる足湯のような効果によるものだろうか。足湯というよりも、生暖かい泥の中に足を突っ込んでいるような気色の悪い感覚ではあるが、心地よい暖かさを感じるのは事実だった。

源造は亜衣の片足を対面側の座席に載せた。足首、ふくらはぎと相変わらず熱心に舐めながら攻め上ってくる。膝頭を舐め終わると次は太ももだ。源造の舌は長く、素早く出し入れする様はどこか爬虫類のそれを連想させる。

薄気味の悪さに亜衣は腰を引く。

狭い座席だ。どのみち逃げ場はないのだが、いつの間にか回り込んだ源造の手に阻まれる。源蔵の手はそのまま尻を撫で回した。最初はなんともなかったのに、いかにも痴漢といった手つきが気になる。

（昨日、あんなことをしたから……）

昨晚の初めての自慰を後悔しながら、源蔵の技に反応し始めたことを自覚した。

源造が舐め回す太ももが、時折、硬直させ素肌の表情を変える。鍛え抜かれた脚は、その中に隠す弾力のあるバネを誇示するようにぴくりと跳ねた。源造の舌は太ももの根元付近まで到達している。舌の移動にリンクするよう、足先で感じた暖かさが腰にまで到達していた。

源造の手はスカートの中に潜り込み、しつかりとスポーツショーツに覆われたヒップを五本の指で握りしめている。腰の暖かさはヒップを握られる度に熱が上がり、熱さと呼んだほうが相応しくなっている。

もう一方の手で太ももを押さえつけ、太ももの間に隙間を作ると、源造は魅惑のデルタ地帯へ顔を埋めてきた。お尻に回した手でプリーツスカートを

たくし上げ、白いスポーツショーツを覗きこむ。約束どおり局部には触れていないが、クンクンと乙女の匂いを嗅いでは生暖かな鼻息をかけてくる。そのおぞましい感触に思わず手を伸ばし股間を覆う。手で壁を作っても源造の鼻息は隙間を抜けて股間へ届いた。

局部はだめでも手なら問題ないだろうとばかりに、股間を覆う指を舐められる。指の先から根元まで大きく源蔵の舌が上下する。

ねつとりとした舌遣い。Mも同じように舌を遣い、舐め合っていた。性器をこんなふう舐められたらどうなってしまうのだろうか？ 亜衣は思わず想像してしまった。体の奥に熱いものが流れたのを感じ、腰をびくつかせた。

(やだっ……わたしつたら、はしたない)

ちよつと好きにさせすぎた。これ以上やらせてはいけない。ガードを立て直そうとしていると源造の携帯が鳴った。メールの着信音だ。

「これからがいいところなのに。次の駅で降りろだってよ。でもまだ着くまで時間がある。もうちよつと触ってもいいよな」

源造がメールを見ている間に、亜衣はすっかりと醒めている。尚もいかがわしい行為を続けようとする源造に肘打ちを食らわせた。引き剥がした源蔵

に目もくれず、亜衣は席を降り立った。

「これかい？」

源造が駅のフェンスに結わえ付けてあった巾着袋を見つけた。亜衣はそれを素早く引ったくった。源造に見られぬように中身を確認するとDVDが入っている。加えて、透明な袋に包装された下着が入っていた。

源蔵も興味をそそられたのか、顔を近づけてきた。亜衣は振り向きもせず、無造作に源蔵の腕を極めた。流れるような動きで、源蔵を這いつくばらせる。

中身を確認していると、見計らったように源造の携帯の着信音が鳴った。源造が亜衣に向けてメール画面を見せる。“溶岩魔神”からのメールだった。「袋の中の下着を着て明日も同じ時間に来い。余計なことはくれぐれもするな、だつてよ」

メールには確かにそう書かれている。

——こちらの状況が監視されている。

亜衣は注意深く観察していたが電車内に怪しい人影はなかった。今、立っている駅のホームも同様である。超小型のカメラでもあるのか、それとも術者が使い魔でも使役していたのか。

「そういうわけだから、また明日。おじさんも本当は忙しいんだけどよ。制服もいいけど、明日はもつと色っぽい格好にしてくれ」

勝手なリクエストを出して、立ち去ろうとする源造を亜衣が呼び止める。
バシンッ！

ホームに乾いた音が響いた。

「ちよつとしつこく触りすぎよ。殺されなかっただけかもしれませんがよね」
痛さの余りへたり込んだ源造を尻目に、亜衣は帰路に就く。

巾着袋には『#2』と書かれたDVDと上下セットの下着が入っていた。
帰宅した亜衣はその下着を慎重に調べる。

下着は昨日見たビデオでMが履いていたものと同じデザインだった。サテンの白く輝く布地に黒い刺繡ししゅうが施されている。商品タグは残されておらず

どこのメーカーの品物かは不明だが、綺麗に折りたたまれ、広げてみても使用痕跡はない。裏に返しても二重底のクロッチ部分には染みもない。肌に傷をつけないように丁寧な縫製された高価そうな下着だった。

入念に調べてみたがおかしな仕掛けは確認できない。『溶岩魔神』はこの下着を着て来いと指示してきた。何かあると考えるのが当然だろう。普通の下着にしか見えなくとも、そのまま身につける気にはなれない。

亜衣は聖水で清めることにした。しばらく下着を聖水に漬けたのち、よく絞ってから干した。夏の夜である。一晚経てば乾いているだろう。

麻衣からメールが届いた。『今晚も彩奈ちゃんの家泊まっています。短くただそれだけ書かれています。』

風呂から出た亜衣はDVDを調べることにした。昨日着ていたキャミソールは汗で汚れたため、今夜は白と水色のボードカラーの半袖パーカに着替えている。

昨日は大画面のテレビで観てしまったのも良くなかった。その反省から自室の小型のテレビで鑑賞することにした。今晚は流されてはいけない。亜衣は己に強く命じる。DVDをプレイヤーにセットした。亜衣はベッドの上で壁に背を預けて座った。

映像が再生され始めた。Mがベッドの上で寝そべっている。Mは半袖のブラウスに赤いリボン、グレーのスカートの制服風姿だ。Mは大きく開脚するとオナニーを始めた。

それを観ながら、亜衣はDVDのケースに白い布きれが付いているのを発見した。ケースに糊付けされていた布は、軽く触れただけで簡単に剥がれた。なんだろう？ 小さく折りたたまれているようだ。広げてみようと思つ張ろうとしたときに、布の中にスツと中指が入り込んだ。

何を目的としたためのものかは分からないが、それは指サックだった。シルクで出来ているようだ。すべすべと安らぐ手触りである。中指を根元まで純白の布地が包んだ。表面には刺繍で椿の花が描かれている。中指だけを見れば、ウェディンググローブを身につけているかのように、美しく清純に輝いている。その輝きに何故か不吉な予感がして指サックを外そうとするが、

ぴったりとはまり込んで指から抜けない。

そうこうしているうちに画面の中のMの手淫は激しさを増していった。下着を脱ぎ捨てて指をズブズブと抜き差しする。亜衣はいけないと思いつつも映像から目が離せなくなっていた。

亜衣の瞳には生半可な幻術など通じない。亜衣の秀でた直感がこれが本物の映像だと告げている。だからこそ亜衣は引き込まれた。

亜衣はいつの間にかファスナーを下げ胸の中へと手を差し伸べていた。パカの下は素肌である。今晚もブラは身につけていない。指サックのすべすべとした肌触りが素肌に心地いい。乳房を揉みながら、中指でグリグリと乳首を転がしていた。

毎日触れている自分の乳房に、今晚はやけに女を感じる。乳房は握りしめる手の平にピッタリとフィットし、柔らかさと指を押し戻す弾力でいつまでも揉んでいたくなる。男が、同性までもがそこに触りたがる理由を今更ながら理解した。そして亜衣は改めて乳房は女性の性感帯なのだを知った。乳房は自分自身の指先に逆らうことなく素直に反応していた。

左右からAとNが現れ、Mに何やらの道具を渡していた。卵形をした物体

はピンクローターだった。もう一つはバイブレータだ。Mはブルブルと震えるローターを乳首に押し当てて。バイブは口で啜え、唾液でたつぷりと湿らせてから、膣の中に挿入し始めた。

なんとも悩ましい声を上げて、Mはバイブを抜き差しする。それを見る亜衣の手は股間を弄り、いけない一人遊びを行っていた。オナニー特有の後ろめたい気持ちを感じる。だけれども、指の動きをとめることはできなかった。

カメラが移動しよりアップでMの痴態を映し出す。Mはタオルを目の上に置き、顔を隠している。半分以上のぞかせた素顔は、麻衣以外であるようには思えない。枕に頭を沈み込ませ快楽を訴えていた。

Mは両足をAとMに舐められている。足の指先から太ももまでを舐められる効果は、亜衣も知るところだ。バイブを操るMの手の動きも熱が籠められていく。手慣れた様子でくいつ、くいつと手首を曲げる動きが淫靡だ。

AとNはMの足をMの頭上へと持ち上げ、Mの体を折り曲げた。枕の上まで足を伸ばし、膝が顔に付きそうだ。柔軟なMの体はそんな姿勢も苦もなく受け止め、つま先から綺麗にまつすぐに足を伸ばし、自らふくらはぎを押さえている。

その格好ではバイブを動かすのは無理があるのか、Aが代わって動かした。Mの浮き上がった腰にズブズブと挿入し、ベッドに沈ませては強靱なバネで跳ね上がる。その動きは何とも卑猥だ。恐らく彩奈であろう少女Aは、普段の快活な様子からは想像出来ないほど大胆に淫らにバイブを抜き差しする。バイブの根元まで淫蜜で濡れていた。

（あんなに深く入っている）

アップで映し出されるMの秘裂を見ながら亜衣は劣情に駆られていた。亜衣はショートパンツの中に手を入れ、パンティの上から己の股間を弄っていたが、その刺激では満足できなくなっていた。

あそこを直接接触するのは怖い。それでも誘惑に負けて手が動いた。パンティの中に潜り込んだ手は自分の意思から離れ、クリトリスを弄り出す。

直接接触る刺激は下着の上からとは比べものにならなかった。複雑な皺が絡み合った花唇をさすると歓待するように花卉が割れていく。割れ目の中に入り込んだ指が、女の入り口の状態を確認する。膣前庭の粘膜が濡れていた。わなわなと膣口がひくついていて。指先を第一関節まで入れて、小刻みに動かすと蜜が溢れてきた。

(着替えたばかりなのに下着が汚れちゃう。こんなことしちゃいけないのに……)

誰に見られるわけでもない。一番リラックスできる彼女自身の部屋で、気持ちとは裏腹に指先は欲望に忠実になっていく。

画面の中では女たちの痴態がまだまだ繰り広げられていた。プレイヤーのタイムカウンターは三十分を過ぎたところだ。昨日のDVDは約一時間だった。まだ半分程度ある。一度、休憩を入れるべきだと亜衣は思った。でもリモコンまで手を動かさない。亜衣の手は自分自身を喜ばすための作業を中断しようとはしなかった。

男が画面に映っている。映っているのは一部だが、体格のしつかりとした男であることが見て取れる。浅黒い肌をした男の腕や足はかなり太い。たるんだ腹を左右から制服姿の女が舐めている。AとNだ。赤い舌を滑らせ男の乳首にチュツとキスをしている。

下半身はMが担当していた。毛むくじやらの太ももに舌を這わし、男の陰

茎を手で握りしめている。男は立ったままの姿勢で女たちの熱烈なリップサービスを受けている。その様子を顔は映さぬよう巧妙なカメラワークで映し出している。

【女の子たちが撮影の口止めとしてサービスしてくれなくなりました。こんな事して貰ってるのに悪いなあ（笑）。全然口止めされる気ないんだよねえ（笑）。こんな気持ちいいこと黙ってるなんて無理っしょ】

テロップが流れた。悪びれる様子もなく、少女たちの行き届いた奉仕の一部始終を暴露する。なんと卑劣な男なのか。

少女たちの全身リップをしばらく映したあと、カメラが男の魔羅の横に固定された。男の先端を赤い舌で舐め回すMの横顔を、鼻からあごまでのアップで撮っている。

鬼獣淫界の淫鬼の天まで突くような魔羅を見たことがあるが、ここまでアップで男の魔羅を見るのは亜衣も初めてだった。野太く赤黒い魔羅だ。血管が幾筋も走り、カリ首は大きくエラを張っている。そこにMが舌を這わすたびにピクンと跳ねる。

Mがその魔羅を飲み込み始めた。こんな太いものを啜えられるのかという

亜衣の心配をよそに、Mの口は半分まで啜え込んだ。Mが小鼻を動かした。それは伝心術の合図だった。鼻と唇の動きで何かを伝えようとしている。亜衣はその動きに注視した。

こんなシーンですることはないのにと亜衣は思うが、こんなシーンでなければカットされてしまう可能性もある。Mがとびきり淫らなシーンで伝心術を行使するのは、そのことを危惧してなのかもしれない。

何ともエロチックな眺めだ。普通に見るなら、うれしそうに鼻を鳴らして啜えている様でしかない。フェラチオの所作に伝心術を巧妙に隠匿している。顔を左右に振り、鼻を動かし、時折動きをとめては、唇をもそもそさせて符牒を送る。顔を振り立てる動きは、より深く啜えこむためのテクニックのようであり、唇は男根の硬度と熱にうっとりとしているようしか見えない。

口唇奉仕を行うMの姿は、一度や二度の経験とはとても思えない。何度も啜えさせられ男に仕込まれたのだろう。ジュボジュボといやらしいバキューム音と共に甘い吐息を振りまきながら男に奉仕している。

汚らしいものを口に入れられ、苦しいだけだろうに、なぜ彼女は嬉しそうなのだろう。男の反応に手応えを感じては、満足そうにより一層の奉仕に励

む。亜衣には到底理解できないが彼女の気持ちだけは伝わってきた。

「はうつ……」

それを見つめる亜衣も声を出していた。控えめだが情感をこめた声を出し、膾内には中指を出し入れしていた。第二関節まで入り込み、指サックが蜜で濡れ光っている。すべすべの指サックの表面は蜜を吸うことでさらに滑らかなり、スムーズな抽挿を可能にしている。

指サックに施された刺繡による凹凸が、ざらざらとした感触を生み気持ちいい。刺繡には数カ所、念入りに縫われた箇所があり、他の部分よりざらつきが強くなっている。そこを自分の体内の敏感な箇所で擦りあげると、より強い刺激が得られるのだ。指サックの使い方をマスターしながら、この指サックはオナニーのために作られたものであることを理解した。

指を動かしながらひどく良心が咎める。Mが男に奉仕までして伝心術を行使しているのに対し、亜衣のしていることは自らの性欲を満たすためだけの自慰行為に過ぎない。ましてやこうしている間にも、彼女は映像と同じ奉仕を強いられているかもしれないのだ。

やめなければいけないという気持ちと、もつとこの感覚を知りたいという

気持ち同居している。自分の指に食いつく秘口の感触が、次第にぬるぬるとしたなんとも淫らになっていくのが感じ取れた。Mの情熱的なフェラチオ奉仕を観ながら、亜衣は指を動かし続けた。

第三章 黒い装飾糸

亜衣は指定より一本早い電車に乗っていた。先回りして調べるためだ。ピンのタンクトップにデニムのホットパンツ姿で美しい手足を惜しげもなく露出している。普段も着ている服だし、源造のリクエストに応えるつもりはなかったが、大胆すぎたかもしれない。

昨夜はDVDを見た後も寝付けず、もう一度してしまった。連日の夜更かして寝不足気味だ。午前中は彩奈の家を訪ねた。けれど誰もいなかった。麻衣たちはどこか別の場所に監禁されているのだろう。結局、収穫はゼロだった。亜衣の鋭い勘も今回の件では全く働かない。

昨日のDVDの伝心術は

——ワ・ナ・キ・オ・ツ・ケ・テ——

という内容だった。罨に気をつけてということだろう。たとえ罨であろうと亜衣には突き進むしか選択の余地はない。

電車に乗っている最中に体に異変を感じた。

乳房にくすぐるような感触がある。股間にも同じ違和感があった。ブラジャーの中から直接、何か乳房に触れている。乳首に何か巻き付いた。糸だ。糸が乳首に巻き付いている。パンティの中も同様だ。糸がピツタリと閉じた割れ目に忍び込もうと辺りを窺っている

やはり下着に何か細工があつたのだ。この世為らざる仕掛けだろう。鬼獣淫界の仕業なのだろうか？

女陰には梅の花弁から作られた護符を入れてあつた。淫界の悪鬼は例外なく女の体を狙ってくる。その最後の防壁として貞操を守ってくれる護符である。今日は祖母、幻舟が遺^{のこ}してくれた護符を付けている。姉妹も護符の作成は可能だが、祖母の作った護符は効力が段違いだ。残り僅かな貴重な護符がきつと体を守ってくれるだろう。

それにしても乗客の視線が気になる。いつもなら多少露出が高い服装をしても、威風堂々とした亜衣をじろじろ見る者などいない。亜衣の強い意志を持った瞳に男はたじろいでしまうのだ。

しかし、今日は違う。下着の中から性器をくすぐられてじつとしていられない。もじもじとしているとそこはかたなく色香が漂ってしまう。それを嗅

ぎつけた男どもがちらりちらりと覗き見ている。

好色な視線に耐えかね、亜衣は次の駅で降りることにした。

ホームに降り立った亜衣は、誰も見ていないことを確認してブラジャーを
ずらす。

「うっ」ブラジャーに触れた瞬間、乳首に痛みを感じた。亜衣の指先を拒絶
するように、糸は乳房に食いつく。簡単には脱げそうもない。

パンティの中はさらに危急の事態である。三つのバツテンの箇所、それぞ
れから糸が内に伸びている。

糸はデリケートな部分を包む底地を抜けて性器に侵食しようとしていた。
一番上のバツテンは淫核を掘り起こそうとし、二番目はぴったりと閉じた肉
びらをこじ開けようとし、三番目は割れ目の中へと入り込み、ひっそりと閉
じた神秘的な肉穴の場所を探っている。

亜衣はトイレに向かうことにした。この下着をどうにかしなければ……。
改札口のトイレへ向かおうとホームを歩き出すと、逆に階段を下りてきた源
造とばったり出くわした。

「おお、亜衣、奇遇だね。これから電車に乗るとこだったんだよ」

源造は相変わらず馴れ馴れしい。

「わたしはもう二度とお前の顔など見たくなくなかったわ」

「そんなこと言わないでくれよ。昨日、亜衣にビンタされて目が覚めたんだ。厄介ごとに巻き込まれてるんだろう。手助けしてやるよ」

遙^{はる}か年下の娘にはたかれて改心するとは情けない男だ。そう思ったとき、亜衣は身震いした。下着の中で蠢^{うごめ}く糸が一段と敏感な場所へと辿^{たど}り着^つこうとしていたのである。思わず両手を前に胸を押さえた。そんな様子を源造は見逃さない。

「亜衣、今日は様子がおかしいな。昨日よりなんか色っぽいというか……」

源造はじろじろと亜衣の全身を舐めるように見る。

「お前には関係ない」

「俺は本当に心配してるのによ。ほら、電車が来るぞ。大事な物、あいつから受け取らなきゃいけないんだろ」

源造の言うとおり、こちらに向かつて線路を走る電車が遠目に見えた。下着をどうにかしたいが、今日もどこかの駅に置かれているであろう茶巾袋を放っておくわけにはいかない。あんな映像が他人の目に入るのはなんとして

も避けなければならぬ。亜衣は電車の到着を待った。

乗り込んだ車両は鷹冨線としては新しいロングシートタイプの車両だった。車両の中には他の乗客は誰もおらず、源造と二人きりだ。

「貸し切りみてえだな。じゃあ早速、昨日の続きをしようとするか」

「待ちなさい。今日はそんなことをするつもりは……」

「仕方ねえだろう。そうしなきゃ、あいつは場所を覚えてくれないぞ。俺だって顔も知らない奴に命令されるのは嫌なんだ」

嫌だと言いながらも源造は亜衣の肢体を目の前にして、嬉しさを隠せず笑みを浮かべている。源造は亜衣をドアに向かって立たすと背後から、剥むき出しの二の腕を触り始めた。

「亜衣だつてやる気満々じゃないか。こんな格好をしてよ」

源造は両脇から手を差し伸べると、両サイドから手の平に力を込め乳を寄せる。タンクトップの隙間から深く刻まれた谷間を背中越しに見つめる。押さえつける手を緩めると、谷間の隙間からお腹まで見通せる。悩ましい半球

を描く美乳の形がよく見えた。

「へへへ、絶景、絶景。見晴らし最高だ」

中年男は亜衣の胸を寄せては離し、その光景を視姦して目に焼き付ける。男の手がタンクトップを突き上げる悩ましい隆起に向かった。

「なあ、昨日より大きく見えるぞ。いいおっぱいしてるんだな、亜衣は」
ムニムニと揉みたてながら源造は感嘆する。

「いつもはスポーツブラで無理矢理抑え込んでるんだろう。こんな素敵なおっぱいを狭いところに押し込むなんて、罰当たりじゃないか。天罰がくだるぞ」

源造は亜衣は巫女であることを知っていて、天罰などと言う言葉を出して揶揄する。源造の言うとおり、ブラはオーダメイドの特注品のように亜衣の胸の形にぴったりとフィットしている。下着に妖しげな仕掛けがなければ、さぞ快適な付け心地だっただろう。

「少し静かにして」

べらべらとうるさい源造に亜衣はうんざりする。源造の攻めに呼応するように下着の中の糸の攻めも激しくなっていた。太めの刺繡糸が、何本か束

なり微妙な刺激を送ってくる。乳首にぐるぐると巻き付き、絞り上げ、先端をくすぐるように動く。邪な力が秘められた魔糸だ。魔糸はこの世のものではない淫らの気配さえ漂わせるようになった。

源造はタンクトップの肩紐を落とすと、上から右手を差し入れ、ブラジャーに包まれた肉丘をむんずと掴む。他に乗客がいないことをいいことにその動きは大胆だ。

源造は兎も角、下着は早く何とかしなければならぬ。亜衣は焦る。下着は亜衣の体に張り付いている。特にパンティの中では陰毛に痛みを感じるほど、魔糸が絡みついているのだ。亜衣の体に取り付いて離さないつもりなのだろう。

刺繍がどこに施されているか、亜衣は目でも体でも覚えていない。一昨日も、昨晚も刺繍の位置を念入りに指でなぞっていたのだ。女の急所に沿って縫われた刺繍糸に責め立てられると、亜衣は己の指遣いを思い浮かべてしまう。鉄壁のガードが緩んだところに魔糸が侵攻した。綻んだ割れ目の中で女体の入り口をくすぐり、淫核をさわさわとして一本、膣前庭の粘膜をつんつんしてはまた一本と、次々に閉ざされた秘穴への侵入を果たす。入り込んだ

魔糸は淫口内部の粘膜を刺激し、仲間の増援を呼んだ。

何本入り込んだのか？ 魔糸の動きが随分と深く感じられた。

その矢先だった。亜衣は抑えきれぬ衝撃に体をビクンとくねらせた。

「ううっ……」

「どうしたんだい、亜衣？ 今日随分と敏感じゃないか」

「ち、違う、そんなじゃない」

聖穴に潜り込んだ魔糸が、梅の護符を突き破ったのだ。護符の障壁が破られた衝撃は処女喪失に似ていた。装着者と一体となった護符が断末魔の悲鳴を上げて、亜衣に鈍い痛みをもたらした。

槍で突き刺すように第二、第三の魔糸がプスリ、プスリと護符を貫通していく。さらに群がる魔糸によって護符はバラバラに引き裂かれた。取って置きの祖母の護符があっけなく破られたことに戦慄を覚えた。

（馬鹿な、おばあちゃんの護符まで……。聖水も護符も効かないなんて、これは一体何なの？）

狼狽する亜衣をよそに、源造は左手もタンクトップの中に忍び込ませて揉みごたえを愉しむ。タンクトップがずり落ち、ブラが半分ほど露呈した。ド

アの窓ガラスに下着が写る。サテン地の輝く下着には、元々あった黒い刺繍が消えていた。黒い刺繍糸はブラの中に入り込みパッドをすり抜けて、乳房に絡みついているのだ。骨張った男の手が無地となった下着の上で五指を蠢かせている。

危険だ。魔糸に込められた淫力は強力なものではない。それでも護符をたやすく攻略されたのは、亜衣にすら見当もつかない何か秘密があるのだろう。一刻も早くこの下着を脱がなければ……。

「源造さん頼みがあるの。これからわたしが言うことを信じて」

「俺は亜衣の味方だ。亜衣の言うことなら何だって信じるよ」

気高い美少女が自分を頼ってきたことに源造は相好を崩して答える。

「この下着はこの世のものではないの。早く脱がないと……。お願い協力して」

「普通の下着にしか見えないがな。お前が言うなら脱がせちゃうか」

美少女をヌードに出来るとわかり、源蔵はほくほく顔である。

源造は背中の中のホックを外した。緩んだカップの隙間から中の状況が垣間見える。黒い糸が白い美乳に絡みついていた。根元を絞り上げられた乳首は赤

く充血している。乳房にも魔糸はとぐろを巻き、たこ 尻糸で絞られたハムのように、肉の盛り上がりを三段に渡り形成していた。

「なんだこれは？ 生きてるみたいに動いてやがる。確かにこの世のもんじやないのかも知れないな」

「分かったでしょう。だから協力して」

「もしかしたら〃余計なこと〃をしたのか？」

生きているかのように蠢き、尚も亜衣の乳房を縛り上げる魔糸を眺め、源造は言った。確かに聖水で清めたが、そのせいなのだろうか。答えぬ亜衣に源造が続ける。

「実はね、あいつから昨日メールが着てね。あれはこのことだったのかもな。解除方法とやらが書いてあつてな」

「そのメール見せて」

「何、簡単なことだよ。亜衣が気持ちよくなればいい。そうすりゃ外れるつてさ」

「本当なの？」

「本当さ、嘘をついてどうする。俺は亜衣の大ファンなんだからよ、嘘なん

かつくわけないって。下着を脱がすのに方法なんてないだろうと思ったが、こういうことだったんだな。俺に任せときな」

源造は左右からカップの中に手を入れ、触り始めた。横乳の比較的、糸が絡みついていない箇所を中心に、汗ばんだ肌の感触を味わいながら、慎重に指を進めていく。

「下の方もこうなってるのかい？」

ためらいながらもうなず頷く亜衣。

「こんなに絞り上げられて可哀相に。でも、まずは上からだ」

源造にもみもみを繰り返されるうちに、魔糸の拘束が緩くなっていく。先ほどは亜衣の指に下着は拒否反応を示した。無理に引き剥がそうとすると拒絶する仕組みなのかも知れない。亜衣はしばらく源造の手に任せることにした。

源造の指先が乳首を絞り上げる魔糸の上をなぞる。ぷっくりとした乳首を親指と人差し指で押し潰す。

「ううっ……」

「その調子だ。リラックスして感じるんだ。段々緩んできたぞ」

男の指先が乳首の先端を転がす。同じ箇所をくすぐる魔糸と連動し、亜衣を攻め立てる。糸と指先との奇妙な連携に亜衣はくぐもった声を漏らした。

源造は亜衣の体を反転させ、自分の方に体を向けさせる。ブラのストラップを肩から落とすと、ブラがずり落ちた。現れた美しい白い乳房に男は目を奪われる。若さを主張する上向いた乳首に、しがみつくように黒い魔糸が絡みついている。亜衣はドアに背を預け、男の視線に耐えた。

「おっぱいしゃぶらせてもらおうよ」

源造はそう宣告すると、乳房に口を寄せた。赤くなった乳首を口に含むとチューツと吸い付いた。こんな中年の男を相手に感じたくはない。でも感じなければ下着が脱げない。その葛藤が亜衣を苦しめる。

乳房に巻き付いた魔糸をなぞり男の舌が這う。乳房の全てを味わうように隈無く舐め回しながら、もう片方の乳房もねつとりと揉みしだく。乳房に張り巡らされた魔糸はほとんど剥がれ、後に残るのは乳首に絡みついた魔糸だけとなった。

「ううんっ」

亜衣が時折こぼす、恥じらいの声を聞きながら、源造が入念に乳首を舌で

転がしていくと、左の乳房から魔糸が離れていった。

「ほら、外れたよ」

源造は顔を上げ、亜衣の前で誇らしげに言うとそのまま距離を詰めてきた。

「何をするのよ？」

「報酬だよ。それぐらいいいだろう、外してやったんだから」

「やめなさい！」

唇を奪おうとする源造の体を亜衣は突き放した。

「うっ……」 亜衣が痛みの呻きをあげた。残る右の乳房に絡みつく魔糸が勢いを取り戻し、乳首に痛みをもたらしたのだ。

「言わんこっちゃない。大人しくしないからだ。まあでも、ブラジャーのほうは大丈夫だろう」

源造はしゃがみ込んだ。

「綺麗なあんよだ。こっちはどうする？」

デニム地のホットパンツから根元まで露出した太ももを撫なでながら、源造は言った。ブラジャーは中途半端なままだが、パンティの中はもつと深刻な事態になっている。

「こつちも脱がせて……」

恥辱に赤らめた顔を横にそむけて亜衣は言った。

亜衣はボタンを外し、ファスナーを降ろしホットパンツを脱いでいく。中から白く輝くパンティが姿を見せる。やはりこちらも黒い刺繍が消えている。下着のなかで何かか蠢く気配があり、亜衣は腰をくねらせている。悩ましい下着姿に男は顔をほころばせた。

「脱ぐつてことはあそこを見てもいいんだな。いじつてもオーケなんだな？」
腰紐に手を掛け、脱がせながら亜衣の了解を求めろ。

「……好きにすればいい」

亜衣は覚悟を決めた。護符を突破した魔糸は既に秘部の奥へと侵入をしていた。何も遮るものがない膣内をさらに深い場所を目指し、魔糸が根を張り巡らせようとしていた。

源造は太ももまで亜衣の下着を降ろす。下着の底部だけが股間に張り付いていた。二重底の布地を突き抜け無数の黒い糸が陰毛に巻き付き、割れ目の中に入り込み、うねうねと動いていた。

「へへへ、これが巫女さんのあそこか。なかなかの生えっぷりじゃないか。」

ふさふさしてやがる。草ぼうぼうのジャングルだな」

亜衣は夏だというのにプールにも行っていない。処理をしていない自然なままの黒々とした毛並みを男に観察されていた。亜衣のアンダーヘアは決して濃い方ではない。細めの柔らかいような陰毛が上品に生えている。だが源造は亜衣の神経を逆撫でするように反対のことを言う。

「……早くしなさい」

他の乗客がいないとはいえ、公共の場である電車の車内だ。そんな場所でお腹にタンクトップをまとわりつかせ、下着も半脱ぎの姿をしている。こんな露出狂まがいの姿を衆目の目にさらすことになったら、どうすればいいのか。亜衣の不安をよそに源造はゆつくりと中心部に指を進めてきた。

魔糸により半ば開いた割れ目をぱっくりと割り開く。内部の状態を源蔵は声を漏らして眺めた。

包皮の中に隠れた陰核に魔糸が伸び、さわさわと刺激を与え暴きたてようとしている。その下では秘苑のなかに何本もの黒糸が潜り込んでいる。

「こりゃあ大変だ。早いところ何とかしないとな」

魔糸に弄ばれるクリトリスを見ながら、源造は膣口を探る。ほんのりと湿

りを帯びたそこに指先を埋めてきた。

「うぐつ……」

糸とは違う異物感に亜衣は呻^{うめ}く。

「きついねえ、この感じ処女みたいだ。いや違うぞ。経験済みかな」

源造は亜衣の膺を鑑定士気取りで探っている。

「ああっ……やめなさい」

「やめちやつていいんだね。やめたら困るのは亜衣だと思うけど」

源造は秘裂から指を抜くと、両手を亜衣の後ろへ回し、剥き出しのヒップを握りしめる。黒糸が聖裂への侵攻を再開するのを眺めながら、柔らかそうな下腹部へ舌を這わす。

源造が次第に己の欲望を満たそうとしているのに不安を覚えながら、それでも亜衣は源造に自分の体を委ねるしかなかった。

亜衣はロングシートの上で四つん這いになり、源造に体を弄ばれている。タンクトップもホットパンツも下着も全て半脱ぎ状態のままである。全裸よ

りもむしろいやらしい姿だ。

床に膝立ちの源造は座席上の亜衣に横から取りつき、半裸の背中を舌で舐めている。重力に引かれながらも形を維持する美しい乳房を下から左の手の平ですくい上げ、乳房の重みを愉しんでいる。右手は秘裂の中を抜き差ししていた。亜衣が処女を失っていることを窺い知ると、慎重な指遣いが遠慮のない大胆なものへ変わっていく。

「うぐうつ……」

亜衣は昨晚の自慰とは違う、他人から与えられる快感に戸惑う。昨晚は体に一段と高い波のような快感が来るのを感じたとき、怖くなり指先を緩めてしまった。今、その波が到来するのを予感する。このまま体を任せていいのかどうか疑問を感じたとき、ドアが開いたことに気がついた。駅に停車したのだ。亜衣は体を硬直させた。誰かが乗ってくるかも知れない緊張に怯えた。^{おび}懸念した新たな乗客はなく、ドアが閉じた。誰も乗り込まぬまま三駅目が過ぎた。ほつと安堵する亜衣に源造が声を掛ける。

「どうした、体を楽にしないと気持ちよくなれないぞ。そうしなきゃ、こいつも外れねえ」

「わかつてるわよ」

源造は臆内に潜り込ませた指をかき回す。寂れた路線とはいえ、ここまで乗客がいないのはそうそうあることではない。早くしないと乳房もお尻も丸出しの猥褻な姿を晒すことになる。スリルを楽しむ露出狂だと思われる方も仕方ない。通報されたら町中で話題になるだろう。

「なあ、おじさんにそろそろ教えてくれよ。ほとんど経験ないんだろう、この新鮮なオマンコは。オナニーだってしたことないんじゃないか？ それぐらい答えてくれたっていいだろう」

先ほどから源造は、亜衣の体験人数を聞きたがる。そんなことを知って何になるといふのか。押し黙る亜衣に、源造は指をずぶりと埋め込んだ。

「言っただろう、遙か昔からお前のファンなんだ。亜衣のことは何でも知っていたんだよ」

「ううっ……」

臆奥でさらに異変が起きている。魔糸が子宮口を探っているのだ。あわよくばそこに侵入し、子宮をも犯そうとしている。

「やつと掴めてきたぜ。この糸の仕組みがよお」

魔糸の邪悪な力と、源造の淫らな欲望が一つになろうとしている。源造は魔糸をコントロールしようとしていた。

「だめよ、この下着は危険なの。この世の物ではない邪悪なものなの。だから、遊んでるならやめて。このままじゃあなたも」

「俺はお前のためなら地獄に墜ちたつていいんだ。どうせ、もうこんな機会ないだろうからな。答えるんだ亜衣、オナニーはどのぐらいしてるんだ」

「ああつ、答えるからやめて。二回よ。これで気が済んだでしょう」

亜衣は源造の執念に負け、ついに答える。

「週二回じゃないのか。生まれてから二回しかしてないのか。なるほど初々しいまんこしてるわけだ。次は男の経験だ。処女じゃないんだろう」

「一度だけ。大学院生としたの。まだする気がなかったのに強引にされたから、そのあとすぐに別れてそれつきりよ。あんつ……」

本当のことを答えても、普通の人間は信じないだろう。根掘り葉掘り聞かれても困る。嘘は言っていない。オブラートに包んで亜衣は答えた。

「こんな極上のカラダしてるのに、一度しかしてないのか。その男、よつぽど下手糞だったんだろう。馬鹿な奴だ。でもなあ、おじさんは亜衣がカラダ

を大切にしてくれて嬉しいよ」

亜衣の秘密が聞けて、源造は満足そうだ。

「じゃあ、次は何を教えて貰おうか」

「もういいでしょう」

「だったら、おじさんの口を塞ぐんだ。そうすりゃ何も聞かないよ」

源造が亜衣の頭を自分に向けさせ、顔を近づける。亜衣は拒まなかった。

源造が唇を重ねる。亜衣の唇の柔らかさを味わう。一度離してからもう一度。

今度は舌を差し挿れてきた。頭を押さえ、ヌタリヌタリと出し入れする。それと合わせ秘裂へ出し入れする指の動きが速くなっていく。

誰にも喋ったことのない性経験を答えたからだだろうか。膣内の感度が上がっている。源蔵の指先も巧みに粘膜を刺激する。

唇を解放した源造が、今度は亜衣の形の良い耳を舐め回し、息を吹きかけながら言った。

「このままカラダを任せるんだ。もう少しの辛抱だ」

「あっ……、ううんっ……」

控えめな声を出しながら、亜衣も快樂の波が押し寄せるのを感じる。淫核

に絡みつく魔糸の本数が増えている。刺激は強いがその分、膣からは抜け落ちていく証拠だ。今は源蔵を信頼した。膣を扶えぐるる源造の指先に、亜衣は体を委ねた。

「はあっん……ああっ」

車内に亜衣の声が響いた。体を震わせながらその瞬間を味わう亜衣。秘部と乳首に張り付いていた魔糸が、力を失い落ちていった。

源造は聖女の蜜で濡れ光る己の指を満面の笑みで眺め、美味そうに舐めとるのだった。

「ここらしいな」

そこは駅構内の男子便所だった。だからといって源造に取りに行かせるわけにはいかない。妹の大事な手掛かりなのだ。誰もいないことを確かめ、便所の中に入った。トイレの中は夏の暑さでもやつとした臭気を放っていた。それでもその匂いはさほど苦にならない。それよりもやたらと体を密着してくる源造に体臭を嗅がれるほうが辛かった。

脱がされた下着は源造が預かり、ノーパン、ノーブラの状態だ。急いで服を着て、電車を飛び降りたから、汗も局部から溢れた蜜も拭き取る時間もなかった。下着を着けていないと、スースーする。体の匂いも漏れ出しているような気がする。恥をさらした後の匂いをいつまでも嗅がれるのはプライドの高い亜衣にとって屈辱だった。

個室の内側のドアノブに巾着袋が掛かっていた。

「あつたわ」

「よかつたな、他の奴に取られなくて」

源造がそう言いつつ、ドアを閉めた。何事か？ 源造はベルトを緩め、ズ

ボンを降ろそうとしている。

「どういうつもりなの？ 引つ叩くわよ」

「わかるだろう、辛いんだよ。自分の体がどれだけ魅力的か知ってるんだろ。う。亜衣のあんな姿を見たんだ。男がどうなるか知ってるくせに。責任を取ってくれよ」

切迫した表情で訴える源造の股間は、下着にテントを張り、突き上げていく。テントの頂点には染みを滲にじませていた。

連日のビデオ鑑賞で自分も眠れぬ夜を過ごしたのだ。悶々とする体と理性を闘わせることがあんなに辛いとは思わなかった。今なら源造の気持ちも少しは理解できた。男の欲望が今にも爆発しそうになっているのがわかる。

「触ってくれるだけでいいからよ、なあ、頼むよ。後でビンタされようが、蹴りを入れられようが構わないからさあ」

源造の並々ならぬ気迫に押され、亜衣は壁に押しつけられた。源造は亜衣の手を握ると、自分の股間へと導く。男の手を拒絶しなかったのは、達した後気だるさが残っていたからだだろうか。源造の悲痛な願いを叶え、亜衣は下着の上から猛々しく勃起した怒張を優しく握った。源造は亜衣の手に筒を作らせ、しごかせる。

「そうそう、動かすんだ」

軌道に乗った動きを数分愉しんだ後、源造は下着を降ろした。亜衣をしやがませ己の怒張と対峙させる。「やだっ」そう言いながらも亜衣は視線を離さない。昨日のビデオでMが奉仕していた怒張が目には浮かぶ。源造の男根はそれよりも細い。鈴口から先走りの粘液を流し、血管が幾筋も不気味に浮いている。

魔羅に見慣れないものを目にした。源造は男根の付け根から中間部分に金色の飾りを装着していた。金色の平べったいリング状で唐草模様の透かし彫りがされていた。リングの一部は閉じられておらず隙間があった。隙間が勃起時とサイズの違いの緩衝となるのだろう。何にせよ悪趣味な飾りだった。状況を飲みこめていない様子で怒張を見つめる亜衣の後頭部を押し、薄紅色の唇に押しつけた。

「ほんの少しの間、先っぽだけ啞えてくれればいいんだ。口を開けて」

源造に急かさされ、思わず亜衣は啞えさせられてしまった。息苦しさと先走りの汁の苦みに顔をしかめる。

（麻衣はこの苦しみに耐えたのね）

麻衣はこれよりも大きな怒張を啞えていたのだ。自分の苦しみなど大したことではないと思ひ直す。

「しゃぶったことなんかないんだろう？ おじさんが動かすから亜衣はそのままじつとしていいよ」

源造が亜衣を氣遣うようにゆつくりと小刻みに腰を動かした。

「亜衣のお口はなんて氣持ちいいんだ」

己の分身を啜える亜衣を上から見下ろし、源造は喜悅の声を上げる。タンクトップの中でノーブラの乳が揺れている。源造は上からむんずと掴み、乳首を転がす。

わたしは何をしてるんだろう？ 異臭漂う便所の中でこんなことをしている自分が信じられない。そんな状況でも乳房を愛撫されて鼻を鳴らす。魔糸から解放されて間もない乳房は敏感なままだ。男に揉みしだかれて、甘い電流が走る。

「うっ……」

不意に源蔵が声を漏らす。同時に魔羅がピクンと跳ねた。間髪入れずに鈴口から粘液が噴射された。

（こいつ、わたしの口の中に……）

源蔵が口内に入れていた時間は一、二分足らず。昨晚見た麻衣の口唇奉仕よりずっと短い時間だったこともある。予告もなく果てた源蔵に口内射精を許してしまった。源蔵は亜衣の頭をがっしりと押さええている。どうしていい分ならず硬直した亜衣の喉に、精液が流れ込んだ。口の中はたちまち一杯になり、頬を膨らませた。

(なんなのよこれ！ まだ出てる……)

どうにか飲まないようにこらえるが、口元から白い筋が糸を引いた。力の抜けた源蔵を押しつけ、洗面台へ走った。吐き出したものの、喉の奥がネバネバする。少し飲んでしまったようだ。なんとも苦い味がした。

口をすすぐようと蛇口を回すが水が出ない。隣の洗面台も同じ。さらに隣も……。なんと、三つある洗面台はいずれも故障中だった。苦みと粘りつく感触に亜衣は顔をしかめる。

第四章 覚えてたの恥戯

ノーパン、ノーブラで街を歩くのは心細かった。亜衣は小走りで帰宅した。散々な目に遭った一日だ。あの後、源蔵がくれたミネラルウォーターで口をすすいだ。源造に往復ビンタを喰らわせたものの、今ひとつ亜衣の気は晴れない。源造は痛みより、亜衣の口ですつきりした悦びのほうが上回っていたのか、あまり効いた様子がなかった。

巾着袋の中にはスポーツウェアとDVDが入っていた。スポーツウェアを取り出すと、折りたたまれたウェアの中に手紙が挟まっていた。

「今晚はそれを着ろ。下着は着るな。明日、それを持って来い」

そう書かれている。これを書いたのは「溶岩魔神」なのだろうか。女の体臭が付いた衣服を要求するなんて、変質者のすることだ。潔癖な亜衣には許し難い性癖である。

風呂に入り汗を流した亜衣は、自室へと戻った。

（ああ、どうして着ちやっただろう）

青いハーフトップと一分丈のスパッツを亜衣は着用していた。巾着袋に入っていたスポーツウェアである。事前に調べ、妖しげな仕掛けがないか確認はしているが、今日あんな目に遭ったばかりでは無いか。自分でもいささか不用心だと思う。

そんな不安をよそに着心地は素晴らしい。柔軟性に富み、とても動きやすい。薄めの素材でぴったりと肌を包んでいる。少しひんやりとした感触が、残暑厳しい夏の夜に心地いい。妖しげな気配を察知したら破つても脱ぎ捨てればよいだろう。

麻衣からは今日も昨日とほぼ同じメールが届いていた。

『今晚も彩奈ちゃんの家泊まります』

メールの内容を信用する気にはもうなれない。何者かが麻衣の携帯を使い、送信しただけであろう。

『#3』と書かれたDVDを持ち、亜衣は再生するのをためらう。このDVDにもいやらしい映像が記録されているのだろう。恐らく昨日よりさらに過激なシーンが……。

今日の収穫はこのDVDだけだ。これを見るより他にない。亜衣はデイス

クをプレイヤーにセットした。

タイトルも無く、いきなり映像は始まった。Mが脚が短めの椅子に座り、足を広げている。AやNの姿はなくMだけが映っていた。キャンディカラーの鮮やかな赤いレースのビキニショーツ一枚の姿で、美しい乳房が丸出しだ。彼女は大人びたセクシーな下着の中に手を入れ、手淫をしている。その手は赤いフィンガーレスグローブで覆われていた。こちらもレース素材のセクシーなものだ。自然とその赤いレースに覆われた手に視線が誘導される。片手は唇に持つて行き、自分の指を舐めしゃぶっていた。指先の細かな動き一つ一つが色香に包まれている。

Mは紅潮した顔を、これも赤い目隠しで覆っている。顔を隠していても、もはや麻衣にしか見えない。Mは唾液で濡らした指を乳首に運んだ。乳首を揉み潰しながら唾液で汚す。「うんっ」Mが声を漏らした。

彼女の切なげな気持ちに亜衣にも伝わってくる。

短く声を上げ、Mは太ももを震わせた。達したのだ。

『また、イツちゃいました』

カメラ越しの視聴者に報告するように彼女は言った。初めて聞くMの肉声

だ。上ずっているが麻衣の声そっくりだった。

男が画面の端から現れた。昨日と同じ男だ。全裸で浅黒い肌をしている。ぽつてりとした腹を揺らし、余韻に耽るMの隣に立った。

『清纯ぶつてた割りに、オナニー大好きなんだな。これで何回目だ』

『アンツ、自分で弄るのが大好き。まだ三回目です』

頬を染めMは答える。Mのショーツも、太もももぐっしよりと濡れ、椅子の座面にまで染みが広がっていた。Mの言葉通り、映し出される前から何度もしていたのだろう。

ベッドの縁で座ってテレビを観る亜衣の足が開き、手が股間に伸びた。見る前には今日こそ我慢すると誓った。それなのに亜衣の決意は五分と持たなかつた。

DVDを見続けて今日で三日目。亜衣は伝心術が行われていようが、行われなかりうが食い入るように画面を見てしまう。半ば習慣づけられているようだった。蠱惑こわくに満ちたMの動きの全てを注意深く観察していたのだから無理からぬことだ。

『三回もイッたのにまだ足りないのか。これも大好きなんだろう。お前が大

好きなものだぞ』

男が腰を突き出すと、目隠しをされたMは舌を伸ばして、それを探し求める。手を使わないように指示されているのか、顔を揺らしながら舌だけで探し当てると、天を突くかのように鋭角に勃起した男根へ口をかぶせた。

探し出したものは、まさに少女の欲しい物だったのだろう。嬉しそうに鼻を鳴らしおしゃぶりを始めたM。その間も休み無く下着の中の手も動かしている。舌を伸ばし、唾液でまぶしながら深々と啜えていく。巨大な怒張が見る間に飲み込まれていった。

今日、亜衣も源造のモノを啜えさせられたばかりなだけに、その技量がいかに優れているのが理解できる。

昨晚のビデオと同じようにMは男へ口唇奉仕をしながら、伝心術を行いだした。熱烈な奉仕をしながら、鼻と^{まぶた}瞼の動きで「ダ・イ・ジ・ヨ・ウ・ブ」と伝えてきた。

(こんなこととして、全然大丈夫なわけがない)

亜衣にはMが肉棒の虜になってしまったようにしか見えないのだった。理性がなければ伝心術は使えないはずだ。こんな状態でも健気に言葉を伝

えてくれるのだ。わたしが信じないでどうする。亜衣は自分に言い聞かせた。それと同時に、そんな姿を見ながら自慰に耽る自分に罪悪感を抱いていた。

二人はベッドに移動した。男はおしめを替えるような格好でMの口唇奉仕を受けている。目隠しを外したが、斜め後ろの角度からのカメラでは顔はよく分からない。手で握りしめ裏筋をペロペロと根元まで舐めている。玉袋のしわを舌で伸ばしていく。娼婦顔負けのテクニクで男を悦ばしている。

口で含み唾液でねとねとにすると、その下のお尻に顔を埋めていく。手で陰茎をしごきながら、お尻の穴までもMは舐めているのだ。

男は膝の裏を抱え尻を持ち上げた無防備な姿だ。麻衣の技量なら体格差などものともせず、男を悶絶もんぜつさせることができるだろう。Mは反抗する様子もなく、奉仕を続けていた。

男がリモコンらしきコントローラのスイッチを入れると、カメラはMの舌先にズームインしていく。汚らしい太い毛の生えた肛門を、忙しく這い回る赤い舌がアップで映し出された。亜衣は心を痛めながらも舌の動きをじつと見つめた。

男が起き上がった。カメラ位置を調節したあと、Mを四つん這いにさせ、

後ろから狙いを定める。カメラは正面からMのあごから下を映し出し出していた。
(まさか、しちやうの?)

男が何か言ったのだろうか。Mはコクリと頷うなずいた。Mの了承を得て、男は後ろからMを貫いた。衝撃でMの双乳が揺れる。見たくはなかった光景だ。Mが悩ましい声を上げ、快感を訴えている。

亜衣は二人が交わるのを見ながら自慰を続けていた。連日淫らなことをしているせいだろうか。体がひどく敏感になっている。スパッツの上からでもはっきり分かるほどクリトリスが勃起していた。

激しく後ろから突かれ、前後に揺さぶられるMはシーツを握りしめ耐えている。ピンク色の乳頭は震え、柔らかそうな乳房は波打っている。Mの声はオナニーの時とは比べものにならないほど情感が込められていた。

『イクッ』

声を上げ、四つん這いのMが崩れ落ちた。

「あっ」亜衣は声に出して小さく叫んだ。

四つん這いの姿勢を維持できず、崩れ落ちたMの顔が画面に映し出されている。それは紛れもない麻衣の顔だった。何かの間違いだ、他人のそら似

であつて欲しかつた。Mが麻衣であることは疑いようのないことであり、覚悟も決めていたはずだつた。それでも、こうして妹の顔が映り、疑いから、揺るぎのない事実になるのはショックだつた。

『おいおい、顔が入つちまうぞ』

『だめつ、顔は撮らないで』

『じゃあ、最初から撮り直すしかないな、麻衣。折角よく撮れてたのによ』
男は麻衣の頭髪を乱暴に掴つかむとカメラに向ける。

『嗚呼、撮らないで、名前も言わないで、お願い撮り直して』

『撮り直してください、だろう。このまま中出しさせてくれたら考えてもいいぞ』

男は腰の動きを再開して言った。

『ああんつ……、撮り直してください。中に……、中に出していいから』

顔出しで撮影されていることで興奮が高まっているのか。麻衣の声はたちまち高まる。

『アンツ……』麻衣がよがり声を上げた。男が麻衣の尻を逃がさぬよう掴んでいる。男の腹が震えている。亜衣にも分かつた。麻衣の中で果てた男が白

濁液をまき散らしているのだ。

——テレビの中の麻衣は相変わらず後ろから突かれている。

ベッドに突っ伏し、麻衣の白い尻が画面の中央に映っていた。尻を力強くつかまれ、柔らかな尻肉に指が食い込んでいる。男の片手が尻の割れ目で動いている。人差し指を突き立てられ、割れ目の奥にまで出入りしている。正面からでは尻に隠れ見えないが、肛門にいたずらをされているのだろう。

『麻衣はケツの穴をいじると、随分素直になるんだな。マン汁垂れ流しだ』
男は尻を掴んでいた手を腰の下へと潜り込ませる。割れ目をぬぐい淫蜜をすくい上げると、カメラに向けて指を広げる。男の言うとおりに指はたつぷりと濡れ、軽く広げた指先で淫蜜が糸を引いていた。

男はハンデイクムを手にとった。画面もその映像に切り替わる。麻衣の尻が上から撮られている。尻の割れ目の奥で、男の人差し指が麻衣の肛門を穿っていた。

『いやよっ、お尻は許して』

麻衣の懇願を無視し、男はさらに指をねじ込んだ。根元まで埋め込まれ、麻衣が悲鳴を上げる。

『こんな可愛い顔しているのに、ケツの穴が好きだなんて。女って奴はやつてみないと分からんもんだな』

『お尻の穴は……、そんなところだめっ、いやっ……、麻衣、おかしくなっちゃう』

指をアナルにねじ込んだまま、ずんずん突くと、拒絶の言葉とは正反対に、麻衣は乱れに乱れていく。

『気持ちいいだろう？ このままハマててもいいよなあ』

『いいっ、気持ちいい、このままして』

『へへっ、よしよし、いい子だ。じゃあもう一発延長だな』

亜衣は妹が男に狂わされていく姿を呆然と見つめるのだった。

麻衣は背面座位で男と交わっている。体位を変えてセックスを続ける妹を亜衣は見ながら、亜衣は淫裂の中で指を擦り上げていた。柔軟性に富んだス

パッツの素材は良く伸び、ウェアの上から弄っても第二関節まで秘苑に入れられた。

既にこうしてから、一時間は優に経過しようとしていた。額から汗が流れ落ちる。全身の汗を拭ぬぐおうともせず、自慰を続けている。よがり声を上げる麻衣と同じように亜衣も声が出てしまう。

「あふっ……うんんっ……」

亜衣の視線にシーツの上にある指サックが目に入った。昨日のDVDと同じようにケースに付けられていた指サックだ。白い光沢で輝いている。

指サックはケースに触れたときにベッドの上にはぼろりと落ちたものだった。その効果は身に染みている。あれを付けたらまた自分を見失ってしまう。使うつもりはなくそのままにしていた。今考えれば、捨ててしまえば良かったのだ。それを見た瞬間、昨日の指サックがもたらす魔悦の感触を体が思い起こしていた。

（我慢しなきゃ……）

そう思うほどに切なく体が疼く。ベッドの上で四つん這いになり手を伸ばした。手を伸ばした先は指サック。中指を少し当てただけでスッと指が吸い

込まれていく。

四つん這いの姿勢のまま、割れ目をなぞると期待した以上の気持ちよさがあった。割れ目を何度もなぞり、己の蜜で濡らしてから、淫核を弄った。既に勃起していたクリトリスはスパッツの中から自己主張していた。自らの願望そのままに指先で転がす。昨日の指サックより刺激が強い。刺繡ししゅうの凹凸が強調して縫われているのだろう。亜衣の自慰行為の覚え具合を予測済みであるかのようにだった。刺繡の凹凸の中でも指の腹の中央部分は強く盛り上がっていた。その箇所箇所でクリトリスを押し潰した。その刺激に大きく声を響かせる。

「はうつんっ……」

指先を膣口に挿入していく。別の生き物のように亜衣の指先は秘苑をかき回す。スパッツの薄い素材越しに指サックの刺激を愉しむ。その指が割れ目に強く押し当てたまま止まった。体をびくびくとさせながら、亜衣は大きく息を吐いた。また達したのだ。これで三度目である。昨日は怖くて行けなかった境地に、今日は難なく辿り着いてしまう。たった数日のうちに自分の体がいやらしく変わってしまったのを実感した。

一方、麻衣は背後の男と濃厚なキスをしていた。男に背を預け仰ぎ見る亜衣は、自分から舌を出し男と舌を絡ませている。キスをしながら男に突き上げられ甘い声を漏らしていた。大きく足を開き、交接部が丸見えだ。互いの陰毛までが黒く濡れ光り、中心部を男根が出入りしている。

M字に開いた足の膝上に置かれた手が、ただ膝を掴むだけではない動きをしていた。伝心術をまた行おうとしている。

快楽に溺れているようにしか見えない麻衣は、まだ理性を保っているのだ。天神子守衆としての務めを忘れず、男の目を盗み亜衣に何かを伝えようとしている。そんな麻衣を見ながら、亜衣の手は次の快感を求めて動き出していた。犬のような格好で浅ましく自慰を行う。自分の行為の罪深さを恥じるのだった。

（ごめんなさい麻衣、きつと助けるから許して）

麻衣はディープキスを続けながら、膝上の指先を動かした。

——マ・ド・ノ・ナ・イ・へ・ヤ——

「窓のない部屋」麻衣の伝心術はそう告げていた。麻衣の監禁場所だろうか。男は麻衣の口を味わい尽くすと、腰の動きをピタリと止めた。麻衣はすっ

かりと上気した顔で戸惑いを見せている。

『麻衣、この次はどうする？ あと一発ぐらいいいだろう』

『これ以上は……これで最後にして』

『じゃあ、これで終わりだな。おい、抜くぞ』

『そんなあ……途中でやめないで。最後までして。ああんっ……もう一回していいから』

麻衣は男の腰上で自分の腰を揺らし、亜衣も見ることがない淫蕩な顔で男を誘う。快楽に溺れる麻衣と、男の隙を見て抜け目なく伝心術を行う麻衣。どちらが本当の麻衣なのか。

『よしよし、話の分かるスケベな巫女さんだ。あの天津麻衣とこんなにタダマンできるとはな』

再開した男のピストン運動に、麻衣は喜悦の声を上げた。

四つん這いの亜衣からぼたりぼたりと汗が滴り落ち、シーツを濡らす。

亜衣はスポーツウェアに秘められた力を漸く理解し始めていた。電車の

中で源造によつて達したときは、氣だるさの中にも充足感があつた。既に四度、アクメを覚えてゐるのにまだ体が満ち足りないのだ。一瞬の満足感のあと、それを上回る渴望に、時を隔てず襲われる。乳房も秘所ももつともつととせがんでゐる。

このウェアは自らの淫らな欲望を閉じ込めて、体外に出すことなく環流するのだ。達する度に濃縮された自分自身の欲望が、体により強い快樂を求めさせる。

こんなものを着ていてはおかしくなつてしまふ。亜衣はどうか指先を止めて、スパッツを脱ごうと試みる。その試みは失敗に終わった。汗と体液を吸い収縮した生地は、隙間なくピッタリと肌に貼り付いてしまつてゐる。指が肌とウェアの間に入らないのだ。辛うじて爪先を入れるが、そこで忍耐の限界が訪れた。

画面の中では麻衣が女性上位で腰を振つてゐる。麻衣の悩ましい声と淫らかな腰遣いを見せつけられては、これ以上我慢することなど不可能だつた。カラダが指先の刺激を欲している。亜衣は手を股間へ戻すと、我慢の分だけ指先で強く擦り、女自身を慰めるのだつた。

何度も見た麻衣のオナニーをトレースし亜衣の指先が動く。埋め込んだ中指で膣口をかき回し、親指で淫核を擦り上げる。

「ああっ……」

亜衣は麻衣の昇り詰める声に合わせて、頂点を極めた。

ご覧頂きありがとうございます。
試し読み版はここまでとなります。

サークル

妄想虜囚

発行日

二〇一三年八月二十一日

連絡先

<https://ci-en.dlsite.com/creator/5672>

<http://pixiv.me/mousou02> (ピクシブ)